

ガッガル平原におけるインダス文明期の諸相

—文明社会の成立と衰退—

上杉 彰紀

Aspects of Indus Urban Society in the Ghaggar Plains

Akinori UESUGI

本稿では、前3千年紀のガッガル平原における都市社会の形成および衰退の過程について考察する。ガッガル平原はインダス文明が展開した地域の中でも多数の遺跡が存在することで知られてきたが、遺跡が数多く存在することの意味あるいはその背景については十分な批判的検討が行われてこなかった。結果としてガッガル平原がインダス文明社会の中で重要な役割を果たしたという言説が無批判に主張されるようになっていく。本稿では、ギラーワル遺跡、ファルマナー遺跡、ミタータル遺跡の発掘調査成果を整理しながら、前3千年紀のガッガル平原においてどのような現象がみられたのかを把握し、都市社会の形成・衰退という歴史事象との関係について考察する。

キーワード：インダス文明、ガッガル平原、前3千年紀、都市社会、地域間交流

In this paper, the author argues the urbanization process in the Ghaggar plains during the third millennium BCE, focusing on occupational patterns, ceramics, seals and ornaments. The Ghaggar plains are known for the presence of a number of archaeological sites dating to the third millennium BCE, however the lack of chronological framework and inadequate publication of excavation results has prevented us from evaluating the historical importance of the region. This paper attempts to outline the chronological changes in various aspects of material culture and society in the Ghaggar plains in response to the rise and decline in Indus urban society.

Key-words: Indus Civilization, Ghaggar plains, third millennium BCE, urban society, inter-regional relationship

1. はじめに

本稿では、インダス文明社会の一角に位置したガッガル (Ghaggar) 平原 (図1) における文化変遷を把握し¹⁾、この地域がインダス文明期の都市社会全体において有した歴史的な位置づけを考察する。

ガッガル平原はヒマラヤ (Himalaya) 山脈前縁地帯にあるシワーリク (Siwalik) 丘陵を水源とする多数の小規模河川によって形成された沖積平野である。北はヒマラヤ山脈およびインダス (Indus) 川の支流であるサトレジ (Sutlej) 川、南はアラヴァリー (Aravali) 山脈およびタール (Thar) 砂漠、東はヤムナー (Yamuna) 川によって画されており、西はパンジャブ (Punjab) 平原に接する。

この平原地帯で最も主要な河川はガッガル川で、平原西半部で多くの支流が合流し、西南に向かって流れている。タール砂漠の縁辺に位置するチョーリストーン (Cho-

listan) 砂漠に入ると、ガッガル川の水は姿を消すが、シンド地方に入ると再び地表に現れ、ナーラー (Nara) 川としてアラビア海 (Arabian Sea) へと注ぎ込んでいる。ヒマラヤ山脈本体を水源とするインダス川に比較すると、河川の流下距離、水量ともに少なく、パンジャブ平原とは同じ沖積平野といっても、その特性は大きく異なっている。

このガッガル平原はインダス文明前後の時代の遺跡が数多く分布することで知られており、中にはインダス文明を支えた核地域の一つと見做す見解もある。ガッガル川をヴェーダ文獻に登場するサラスヴァティー (Sarasvati) 川に比定する学説とともに、ガッガル平原がインダス文明期から続く前2千年紀にかけてきわめて重要な歴史的意義を有していたという主張がある (Gupta 1996)²⁾。

多数の遺跡が存在しているのは歴然とした事実であるが、残念ながらガッガル平原がインダス文明期にどのよう

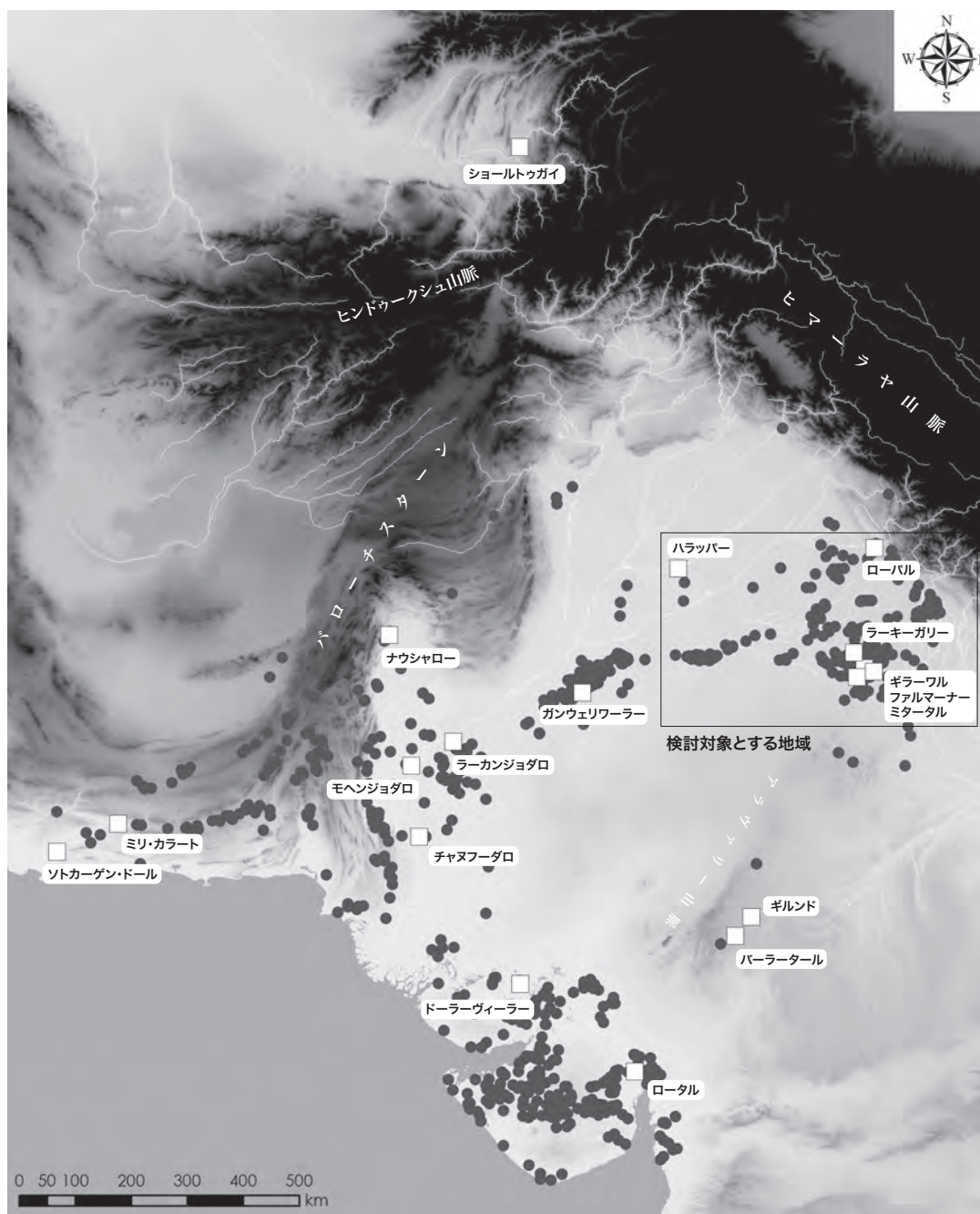


図1 遺跡分布図 (筆者作成)

な役割を果たしていたのか、その意義について何らかの評価を下すにはあまりにも不明な点が多い。これまでに47ヶ所の遺跡の発掘調査が行われているが³⁾、その成果の公表がきわめて限られているためである。十分な根拠のない評価・解釈が先行しているところもあり、一次資料の蓄積と基礎的な検討が不可欠である。

本稿ではこうした研究の現状を鑑み、先インダス文明期からポスト・インダス文明期にかけてのガッガル平原における文化現象の基礎的な整理を行い、インダス文明の形成期から衰退期にかけての文化変遷を把握することを試みる。

文化変遷の把握を試みるにあたって、遺構、土器、印章、装身具の4つの要素に着目する。遺構の変化は居住空間の変化の一端を示すものであり、その変化の中に都市的要素がどのように見出されるか検討することによって、都市社会の盛衰に連動した生活様式の変容を考察することが可能である。

土器は多くの遺跡で出土していることから地域間交流の一端を考察する上で重要な検討対象資料である。器形、製作技術、文様などさまざまな要素に地域性や地域間交流の様態を検討することが可能で、ガッガル平原における社会



図2 ガッガル平原における遺跡の分布（前3000～前1500年頃。筆者作成）

が周辺地域とどのような関係をもちながら展開したのか考える手がかりとなる。

交易活動に関わると考えられる印章もまた地域間交流の様態を把握する上で有効な指標である。ガッガル平原では先文明期から印章が出現しており、その特徴と分布を検討することによって、ガッガル平原が広域社会関係の中にどのように取り込まれていったのか考察することが可能となる。

装身具は石、粘土、金属、貝などさまざまな素材によってつくられているが、それぞれの素材の産出地の分布は大きく異なっている。粘土はガッガル平原のみならずインダス地域全域で普遍的に分布する素材であるが、そのほかの素材は地域的に偏在するという特徴を有している。ことにガッガル平原では粘土以外の素材の原産地は存在しておらず、いずれも遠隔地からもたらされたものである。つまり、原産地と消費地の距離関係によってより具体的に地域間交流の様態を検討することができる。

以上4つの要素が先文明期から文明終末期にかけてどのように絡み合いながらガッガル平原において展開したのか検討することによって、ガッガル平原における文化変遷を地域社会と周辺地域との関係という2つの軸によって理解することが可能となる。

依然として資料は限られており、十分な検討が及ばないところも多いが、インダス文明社会におけるガッガル平原の歴史的意義、ひいてはインダス文明社会そのものに対する理解を深めていく上での叩き台としたい。

2. 検討対象遺跡とその文化編年

検討対象資料としては、筆者が調査に参加したギラーワル (Girawad) 遺跡、ファルマーナー (Farmanar) 遺跡、ミタータル (Mitathal) 遺跡の資料を中心としつつ、一部にせよすでに公表されている他遺跡の資料を含めて検討を進めることにする (図2・表1)。

これら3つの遺跡はガッガル平原の中でも東南部に位置しており、ガッガル川の支流の一つであるチョウタンダ (Chautang) 川に近いところにある。これら3つの遺跡だけでガッガル平原全体における文化変遷を復元できるわけではないが、発掘調査によって豊富な資料が得られており、今後の研究の出発点として位置づけることが可能である。

ギラーワル遺跡は出土土器と ^{14}C 年代測定値によって先インダス文明期に位置づけられる遺跡である (Shinde et al. 2011b)。 ^{14}C 年代値は2点のみで、かつ大きく乖離した値が得られていることから評価が難しいところである。

表1 編年表 (筆者作成)

		ハラッパー	カーリー・パンガン	ラーキー・ガリー	ビッラーナー	クナール	ギラーワル	ファルマーナー	ミタータル	バグワンブラ	マディナ 2
前 1500 年	ポスト文明期									IB 期	
		5 期								IA 期	
		4 期									
前 2000 年	文明期	3C 期	?	?	?						
		3B 期	II 期	II 期	IIB 期						
					?						
前 2500 年	文明期	3A 期			IIA 期						
前 3000 年	先文明期	2 期	I 期		IB 期	?					
		1 期	?	I 期	IA 期	I 期					
				?	?	?	?				

が⁴⁾、出土土器の中に確実に前3千年紀前葉に位置づけられるコート・ディジー式・系土器⁵⁾が存在することから (Uesugi 2011c)、2点の年代値のうちの一つとともに前3千年紀前葉を含んでいることを明示している。

ファルマーナー遺跡については出土遺物、¹⁴C年代測定値ともにインダス文明期、特にその前半期(前2500～前2300年頃)を中心とする時期の遺跡であることを示している (Shinde et al. 2011a)。また、最下層からもハラッパー式土器 (Harappan pottery) が出土することから、文明期になって居住が開始された遺跡であることがわかる⁶⁾ (Uesugi 2011a)。この遺跡では集落域のみならず墓地の発掘調査も行われており、墓地では文明後半期に一部かかると考えられる土器も出土しているが⁷⁾ (Uesugi 2011b)、大きくは文明前半期の遺跡として捉えることが可能である。

ミタータル遺跡も同じくインダス文明期の遺跡であるが、¹⁴C年代値と出土遺物はファルマーナー遺跡よりも新しい時期を中心とした遺跡であることを示しており、インダス文明後半期から終末期にかけての時期(前2300～前1900年頃)に位置づけることができる⁸⁾ (Manmohan Kumar et al. 2011, 2012)。

このように、これら3つの遺跡の調査成果の比較によって前3千年紀前半から前2千年紀初頭にかけての文化変遷を把握することが可能となる。

3. 先文明期の様相 居住空間

先文明期に関しては、居住空間の実態が明らかになる遺跡はほぼ皆無である。ギラーワル遺跡では大小の土坑群が多数検出されており(図3)、大形土坑は堅穴住居の可能性も推定されているが (Shinde et al. 2008a, 2011b)、発掘調査範囲が土器生産を含む工房址であった可能性があり、一般的な居住区域であったかどうか不明である。また、発掘調査区の北側では断片的かつ帰属時期不明ながら日干煉瓦を用いた遺構の一部が地表面に露出しており、大形土坑をこの遺跡の一般的居住施設と断定することを難しくしている。

詳細は不明であるが、クナール (Kunal) 遺跡 (Khatri and Acharya 1995) やビッラーナー (Bhirrana) 遺跡 (Rao et al. 2004, 2005, 2006) でも先文明期の文化層が発掘され、堅穴住居と推定される大形土坑が検出されている。しかしながら、堅穴住居として大形土坑を同定するには積極的な根拠を欠いており、当該期の一般的な居住空間の型として認定することもまた難しい。一つ確実にいえることとしては、上に挙げた遺跡では大形土坑群に煉瓦積建物が伴っていないという点であり、集落内に煉瓦積建物を含まずに土坑群によって遺構が構成される区域が存在したことは確かである。

一般論的ではないが、文明期のモヘンジョダロ (Mohenjodaro) 遺跡やハラッパー (Harappa) 遺跡、そして以



図3 ギラーワル遺跡 遺構平面図 (Shinde et al. 2011b より。一部改変)

下に述べるファルマナー遺跡では煉瓦積建物が街路と組み合わせて密集的に配される特徴を有しており、工房もまた煉瓦積建物群の内部に取り込まれていることが多い。とすれば、ギラーワル遺跡にみられるように、煉瓦積建物群から独立して工房域が存在した可能性は当該期の集落構造を考える上で一つの手掛かりとなるかもしれない。ここでは仮説的ながらこうした遺構構成を分離型居住空間として把握しておくことにしよう。

一方、ガッガル平原西半部に位置するカーリーバンガン (Kalibangan) 遺跡 I 期 (Lal et al. 2003) やバナワリー (Banawali) 遺跡 I 期 (Bisht 1982; Bisht and Asthana 1979) では日干煉瓦積建物が検出されている。カーリーバンガン

遺跡やバナワリー遺跡では先文明期に属するとされる日干煉瓦積周壁が確認されており、ギラーワル遺跡とは異なる型の居住空間が存在した可能性が高い。残念ながら周壁内部にどのような居住空間が形成されていたのか情報は乏しいが、おおむね同時期と判断されるハラッパー遺跡 2 期においても日干煉瓦積周壁が存在したことを考慮すると (Meadow and Kenoyer 1994)、ガッガル平原西半部ではさらにその西のパンジャブ平原の影響を受けて、ほかの地域の遺跡よりも早い段階で居住空間の一部を周壁で囲むという居住空間の型が出現していた可能性がある。

このように、この時期の居住空間の実態については不明な点が多い。堅穴住居の存否のみならず、周壁をもつ集落

についてもその実態はほとんど不明である。この時期にはハラッパー遺跡のみならず、インダス地域各地に拠点集落が出現していたと考えられ、カーリーバンガン遺跡やバナワリー遺跡もそうした拠点集落の一つであった可能性が示唆されるものの、拠点集落とそれ以外の集落を居住空間という視点から分けることは難しいのが実情である。仮にギラーワル遺跡の状況を分離型居住空間と把握することが正しいのであれば、この時期の分離型居住空間と続くインダス文明期の一体型・密集型居住空間の関係をどのように理解するかが課題の一つとして位置づけられるであろう。

土器

先文明期に関しては、発掘された遺跡が少なく、さらに報告精度が低いため、面的かつ高精度な検討が難しい。そうした状況の中で、ギラーワル遺跡出土資料は当該期の土器の様相を考える上で多くの手掛かりを与えてくれる(Uesugi 2011c)。

ギラーワル遺跡の出土土器はその大半が土坑からの出土である。その出土状況は多様で、短期間に完形を含む遺存度の高い土器が土坑内に堆積したと考えられる一次的出土状況から、比較的長期間にわたって土坑内に流入したと考えられる二次的出土状況までが含まれる。編年研究においては一次的出土状況からの資料の検討が重要だが、ギラーワル遺跡ではハラッパー式土器がまったく出土しておらず、少数ながらも¹⁴C年代が示す値を勘案すると、文明期以前である可能性が高い。

こうした出土状況を前提にして出土土器をみると、製作技法の上で2群に大別が可能である。

第1群は非ロクロ成形技法、幅狭・広の黒色帯を特徴とするソーティ=シースワール式土器である(図4上)。ギラーワル遺跡の土器組成において主体となるもので、同時にガッガル平原において広く出土している土器群である。続くインダス文明期にも主体的に存続するところからみて、ガッガル平原在地の土器群である可能性が高い。

第2群はロクロ成形技法を特徴とする土器群で、中でも櫛描平行線文を施した壺が特徴的で(図4下)、ギラーワル遺跡では客体的である。こうした土器はガッガル平原の他の遺跡でも確認できるほか、西のパンジャブ地方、ゴーマル地方、バンヌー地方でも多く出土している。いわゆるコート・ディジー式土器(Kot Diji pottery)であり、パンジャブ地方からシンド地方を核とする地域に起源する土器と考えられる。同様の土器はガッガル平原各地に散在的に出土している(図5)。

ガッガル平原での出土例が西方からの搬入品か、あるいは西方からの影響下でガッガル平原において製作されたものか、現状では解釈が困難であるが、こうした在地土器の

成立とコート・ディジー式土器の波及という2つの現象はガッガル平原における文明形成期の様相を考える上で重要である。コート・ディジー式・系土器の存在は、ガッガル平原が西のパンジャブ地方との交流関係を有していたことを物語っているからである。特にコート・ディジー文化がガッガル平原のみならず、周辺地域に拡散・拡大する傾向を有していることを考慮すれば、ガッガル平原はコート・ディジー文化を核とする広域交流ネットワークの中に取り込まれていた可能性が高い。

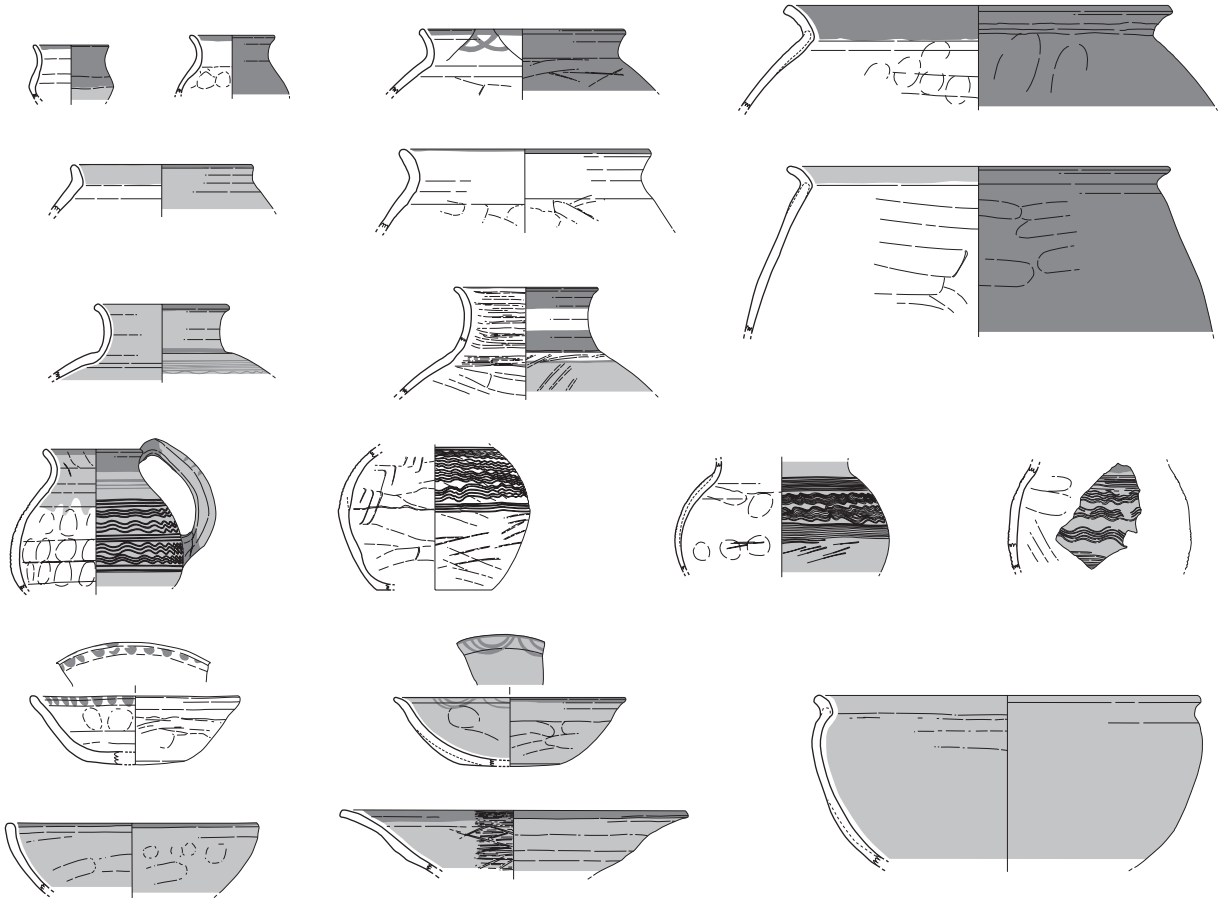
しかし、在地要素が主体的に存在することはコート・ディジー文化のネットワークの中に取り込まれながらも、地域内のネットワークが維持されたことを示しており、広域／狭域、外来／在地という二極構造の出現を看とることができる。この二極構造は続く文明期にもみられる特徴であり、ガッガル平原社会の特徴といえることができる。

印章

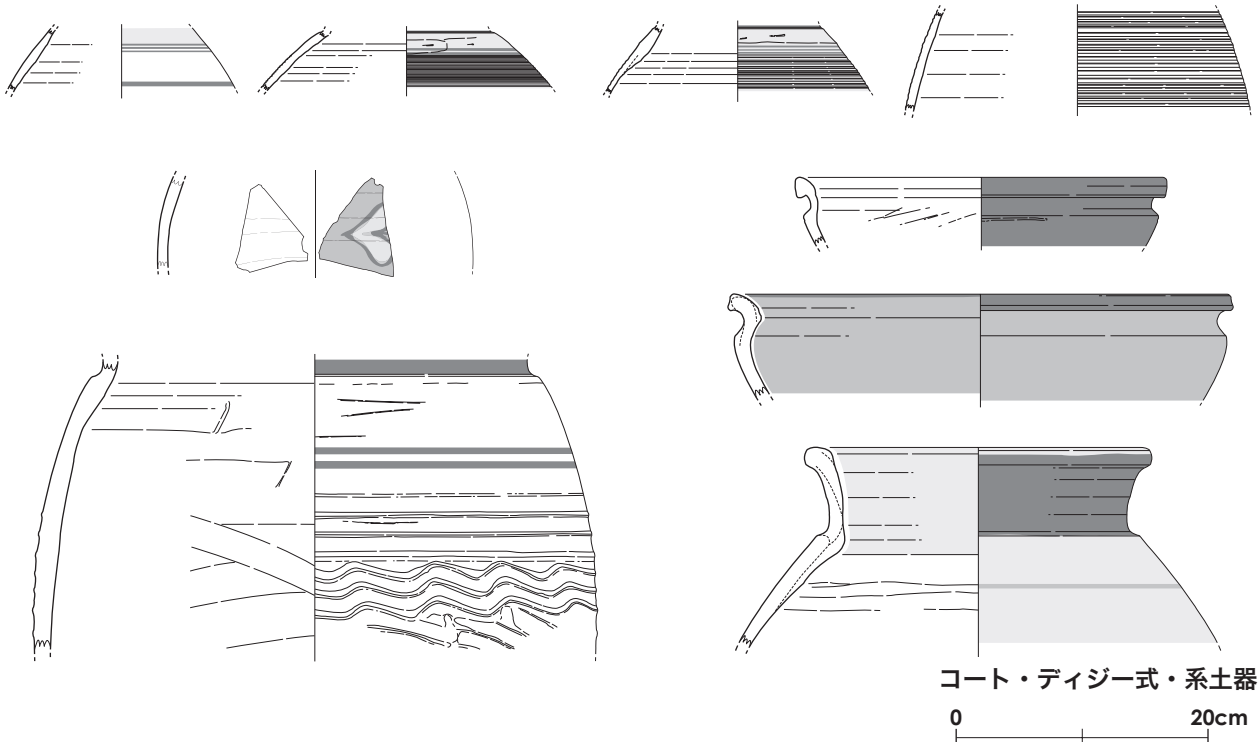
次に印章の出現と展開について検討してみよう。ガッガル平原における印章の出現は先文明期にさかのぼる。そもそもインダス地域における印章の出現は前3500～前3000年のことで、出現期の印章はバローチスタン(Balochistan)高原東縁部に限られる(メヘルガル(Mehrgarh)遺跡Ⅳ期、ラフマーン・デーリ(Rehman Dheri)遺跡Ⅰ期)。その形態はイラン高原に起源をもつ幾何学文印章であり、2つ孔のボタン型印章と鈕付印章がある。いずれの形態もイラン高原に起源するものである。

前3000～前2600年頃になると、バローチスタン地方のみならず、パンジャブ平原、ガッガル平原でも印章が分布するようになる(図6)。その形態にはイラン高原系の幾何学文を刻んだ印章と同心円文を組み合わせた印章があり、後者はこの時期になって出現したものと考えられる。その起源については十分に検討できていないが、イラン高原との関わりをもちながらも、インダス地域に起源するものである可能性が高い(Uesugi 2011d)。

ここで注目されるのは、この時期の印章の分布がバローチスタン高原東縁部のゴーマル=バンヌー地方、パンジャブ地方、ガッガル地方に集中することである。しかもイラン高原系と同心円文系がともにこれらの地域に分布していることは、地域間のつながりを示唆している。上述のコート・ディジー式・系土器の分布とあわせて、この時期のガッガル平原が西側の地域と強い交流関係を構築しつつあったことを示していると考えられる。特に印章の存在は、交流関係が偶発的なものではなく、制度化あるいは管理化される性格を有したものであった可能性を強く示しているといえるだろう。



ソーティ=シースワール式土器



コート・ディジー式・系土器

0 20cm

図4 ギラーワル遺跡 土器 (Uesugi 2011c をもとに作成)

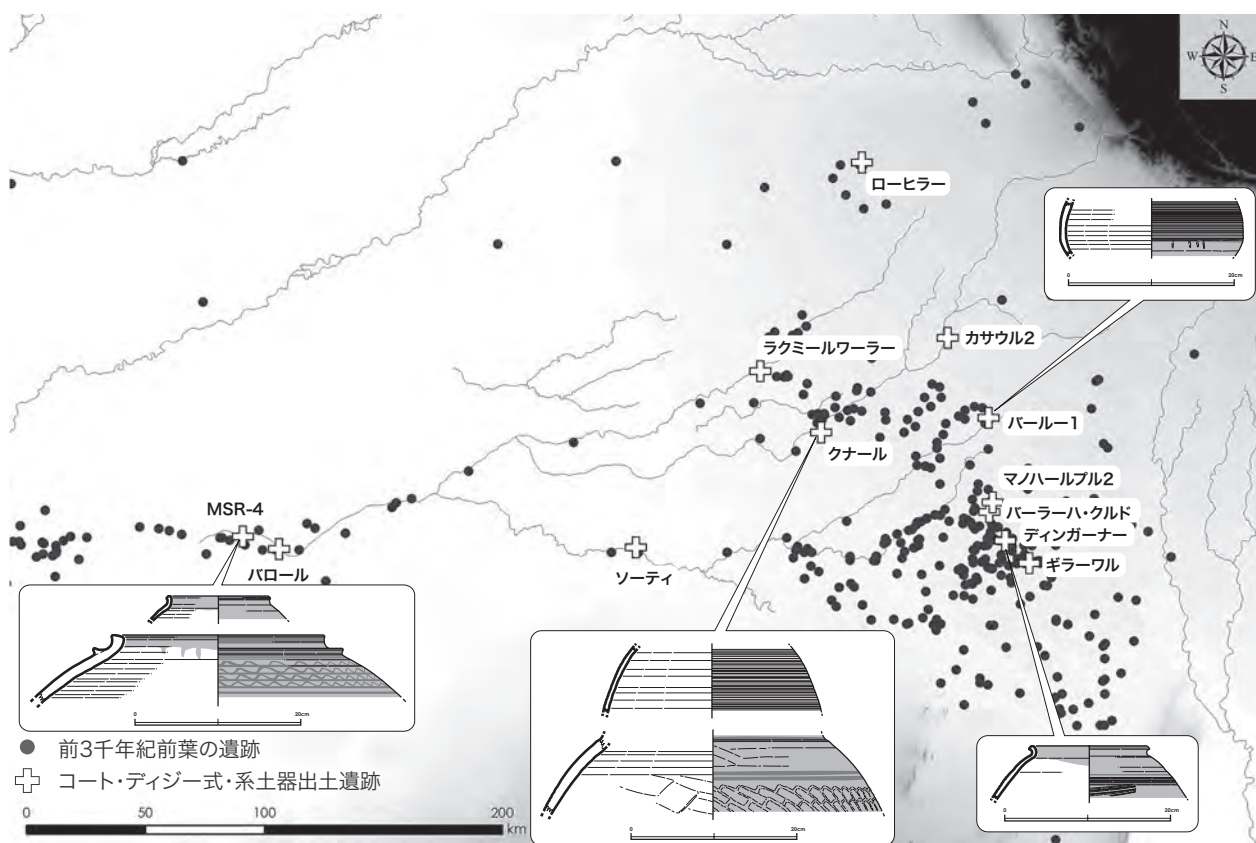


図5 コート・ディジー式・系土器分布図 (筆者作成)

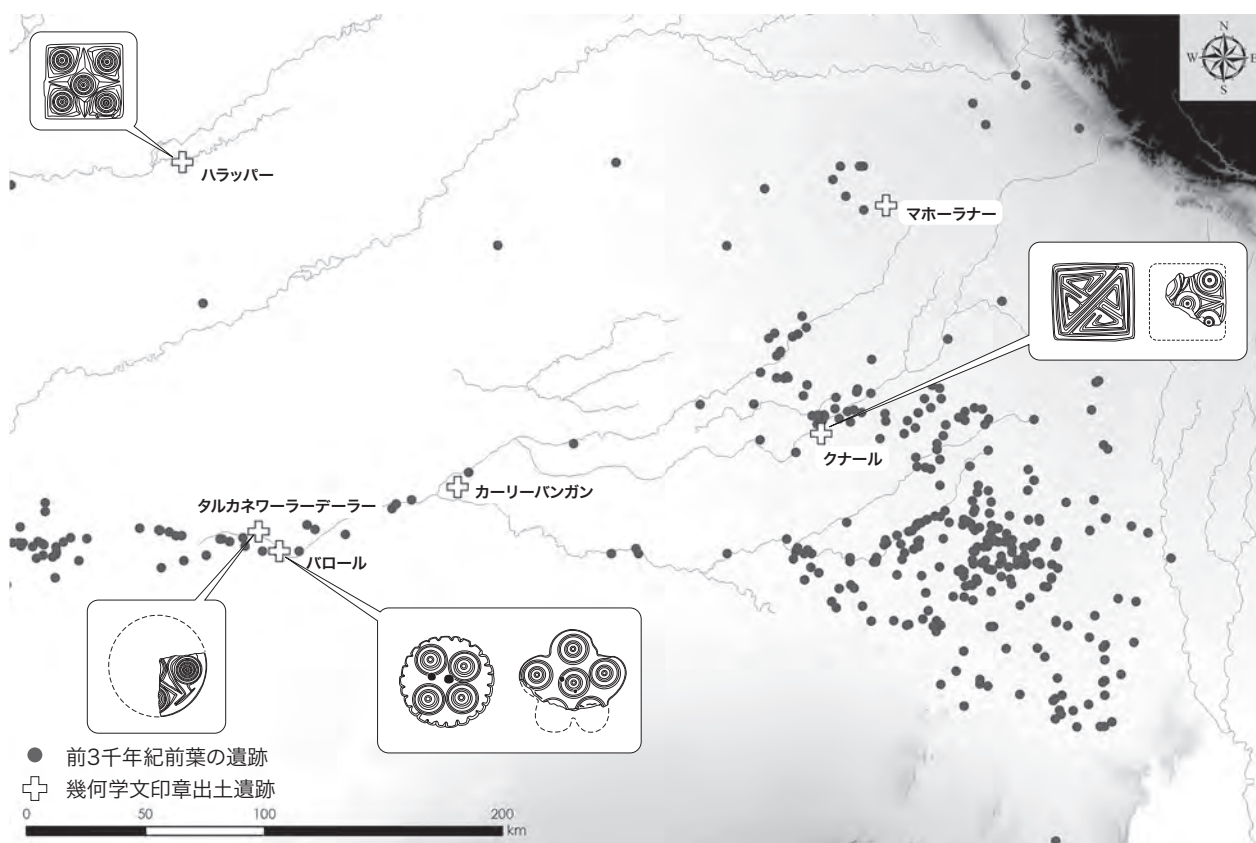


図6 先文明期における幾何学文印章の分布 (筆者作成)

る。直交して走る街路と建物・部屋空間によって居住域が形成されており、建物の内部から街路へと通じる排水溝が各所に確認できるほか、建物内には厨房や浴室が取り込まれている。

また、発掘調査の精度により確定はできなかったが、瑪瑙製玉未成品や剥片がまとまって出土している区域もあり、玉製作工房が建物内部に存在した可能性がある。土器焼成窯と推定される遺構も建物内部で検出されており、工芸品生産が集落内部で行われていた可能性を示している。

印章は4点のみであったが遺構時期4・5期の建物に伴って出土している。集落内部における印章の分布については、詳細がわかる調査例に限られているため判然としないうところが多いが、交易に関わる機能やそうした機能に由来する威信財としての価値を前提とすると、地域社会の中で上位に位置する人物あるいは集団が集落内に居住していた可能性がある。

また、土器では外来系のハラッパー式土器と在地系のソーティ＝シースワール式土器が揃って集落内で出土している。出土・分布状況において明確な差異はなく、集落内に居住した人々によって混在的に使用されていたと考えられる。実際の生産の場は未特定であるものの、それぞれが独自の製作技法、器形、装飾の特徴を有するところからみると、異なる工房で生産されたものが集落に搬入されて消費されていた可能性が高い。

このようにみると、日常生活行為と工芸品製作工房に代表されるさまざまな活動が集落内で行われているとともに、社会的に複数の階層に属する集団（交易従事者、工人など）が遺跡内に併存していた可能性が考えられる。

文明後半期に属するミタータル遺跡では、遺跡の広範な範囲に及んで日干煉瓦積建物が広がっていた可能性が高いが、実際に面的に日干煉瓦積建物を発掘したのは10m×20mの範囲である（図8左）。ここでも街路と建物・部屋を組み合わせた配置がみられ、建物内部には厨房空間が取り込まれ、街路には排水溝が設けられている。また、断片的ながら石製玉製作の痕跡も確認されており、工芸品生産が集落内で行われていたことを示している。

こうした煉瓦積建物と各種の生活行為・工芸品生産活動を取り込んだ居住空間は、文明期の他の遺跡においてもかなり一般的に存在した可能性が高い。また、この時期の居住空間に関連して注目されるのは周壁の存在で、ミタータル遺跡、パナーワリー遺跡、ビッラーナー遺跡、パールー遺跡、ローヒラー（Rohira）遺跡⁹などで確認されている。遺跡の一部を囲むのかあるいは全体を囲むのかによってその意味・役割は異なってくるであろうが、集落を周壁で囲むという特徴は、この時期の集落の一部ないし全体が閉鎖的な空間の中に形成されていたことを物語っている。

当該期における戦争あるいは戦闘行為の有無はよくわかっていないが、少なくとも集落を周壁で囲むことによって居住空間を区画し、その内部で種々の活動を展開させることで集落を一つのコミュニティとして完結させ、外部から分離しようとする意図が存在したことを窺うことができる。こうした密集型に配置される煉瓦積建物群（一体型・密集型居住空間）と諸々の活動から構成される居住空間を、都市的居住空間と呼ぶことにしたい。

先文明期の様相が明らかでないことから、今後の調査の進展に俟たざるを得ないところが多いが、先文明期に通常の居住域あるいは集落と工芸品生産工房が分離して存在していた可能性を認めるならば、分散型居住空間から集住型・一体型都市的居住空間への転換は都市社会の成立に関わる現象であると考えられる。また、ミタータル遺跡の調査成果によれば都市的居住空間は文明期を通して遅くとも前2000年頃までは維持されていたことがわかる。

土器

文明期の土器はハラッパー式土器と在地系のソーティ＝シースワール式土器によって構成される（図9、図10）（Uesugi 2011a, 2011b; Manmohan Kumar et al. 2011, 2012）。文明前半期のファルマーナー遺跡では地点・出土層位によって多少のばらつきを示すものの、おおむね在地土器とハラッパー式土器の割合が7:3である。上述のように、両者の使用、廃棄の状況に違いはなく、同一空間で両者の土器が使用されていたことは明らかである。また、ファルマーナー遺跡墓地においても一つの墓葬で両者の土器が揃って副葬されており、消費レベルでの明確な使い分けは認められない。

この時期の在地土器は先文明期の第1群と共通する基本要素によって構成されており、先文明期の在地土器が連続的に発達したものと考えられる。すなわち、広狭の黒色帯を特徴とする壺、幅狭黒色帯を口縁部にめぐらす鉢である。器形レベルでみると、口縁部の肥厚化や輪高台を伴う丸底という底部形態の主体化といった変化があるが、大きくみると明確な変化はない。ただし装飾についてみると、壺では幾何学文を充填する胴部文様帯が定型化し、鉢では内面に櫛描沈線文を施す例が多くみられるようになる。

ハラッパー式土器については依然多くの検討課題を残すものの、コート・ディジー式土器を母体として成立した土器様式と考えられる。ただし、器形や文様のレベルではパローチスターン高原の土器様式の要素も取り込まれており、先文明期終末に平原部と高原部の交流関係が強化されることを勘案すると、高原の要素を取り込みつつシンド地方およびパンジャーブ地方の平原部で成立した土器と評価することができる（上杉・小茄子川 2008）。

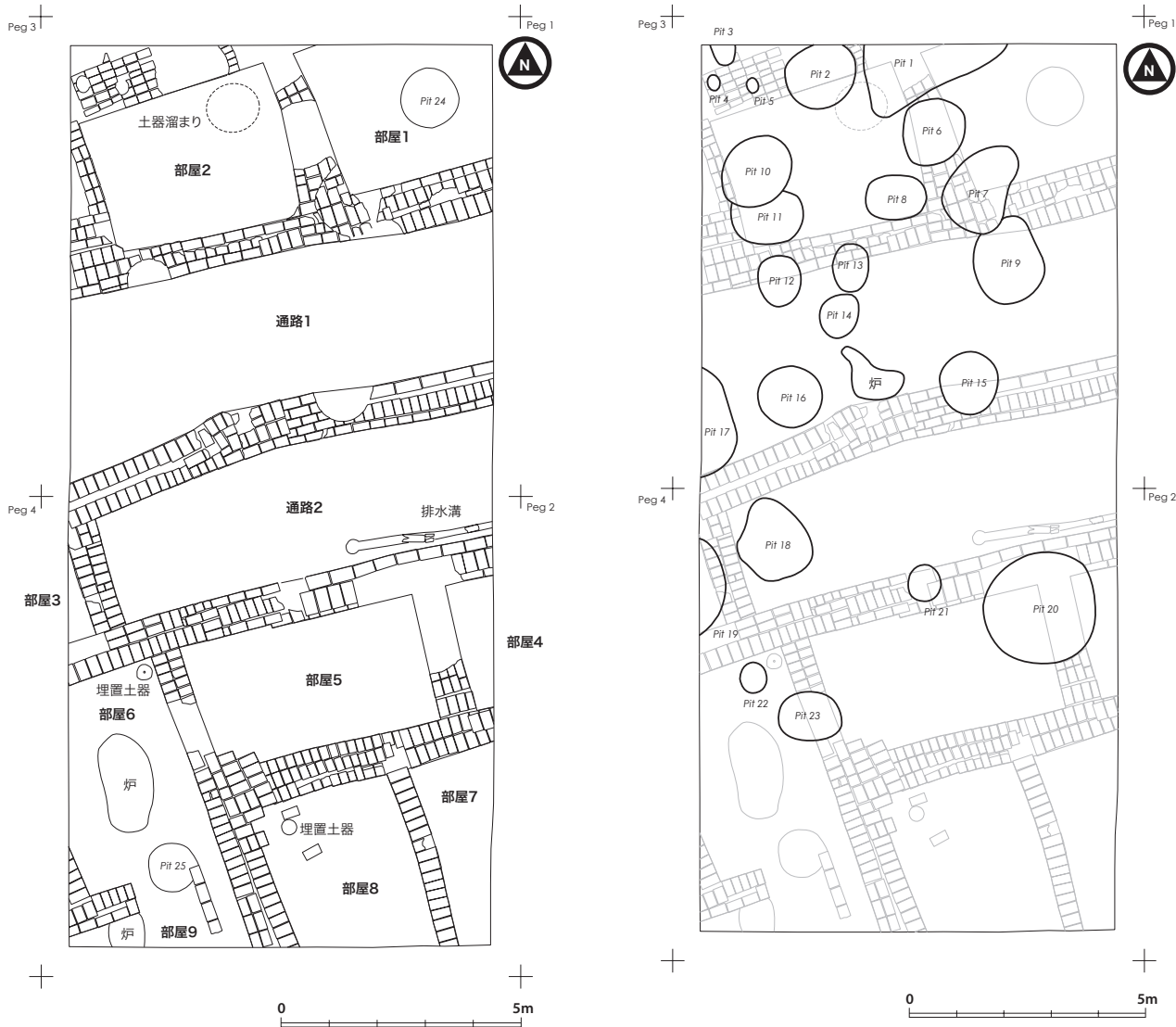


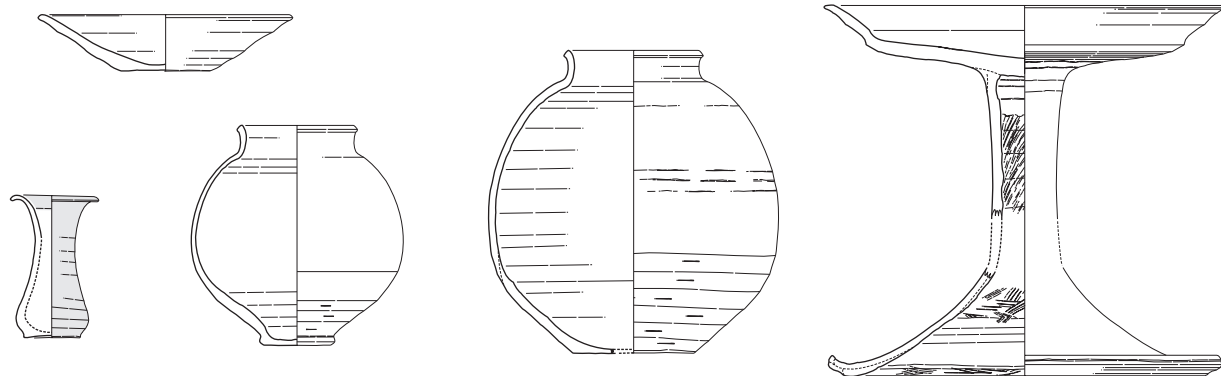
図8 ミタータル遺跡 遺構平面図 (左: 前 2200 年頃、右: 前 2000 年頃)

ハラッパー式土器は彩文土器と無文土器からなるが、ガッガル平原ではともに出土している。土器様式の一部が搬入品として偶発的に流入したのではなく、土器工人を含む継起的移民がハラッパー式土器の拡散に伴っていると考えられる。胎土分析など課題は多いが、ガッガル平原にハラッパー系土器工人が移住しハラッパー式土器を生産・供給していた可能性が高い。つまり、ガッガル平原ではハラッパー式土器を生産する工房と在地土器を生産する工房が別個に存在しており、それぞれから土器が集落へと供給され、揃って消費されていたと考えられるのである。

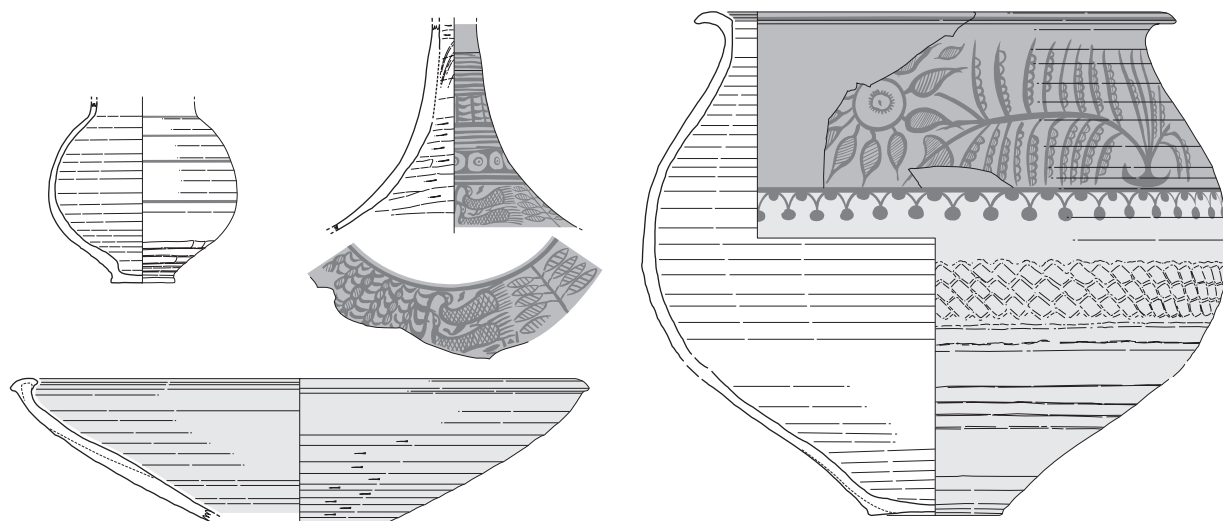
こうした土器という日常消費材のレベルで異なる様式の土器が近接して生産されるとともに消費される背景は判然としないが、先文明期に成立した二極構造は文明期にもハラッパー文化と在地文化という形で維持されたことがわかる。この二極構造は個別要素それぞれの出自の違いにとど

まらず、土器以外の遺物、すなわち遠隔地産・偏在型素材を用いた工芸品の広域流通にみられるように、それぞれがもつ交流ネットワークの広域／狭域の空間的広がりの違いやそれゆえの稀少資源へのアクセス力の違いといった社会的差異も内包していると考えられ、結果的に社会的ステータスにもその関係は及んでいると推定される。

文明後半期におけるミタータル遺跡でも在地土器とハラッパー式土器が出土しているが、ファルマナー遺跡に比較するとハラッパー式土器が全体の土器組成において占める割合は少なく、20%以下である (Manmohan Kumar et al. 2011)。また、器形や彩文のレベルでも明瞭な違いがあり、時期的な変化を示している。さらに注目されるのは、前半期を特徴づけた典型的なハラッパー式土器の文様はみられなくなり、ハラッパー式土器に在地土器起源の文様が描かれるようになる。こうして生じた変化は最終的に

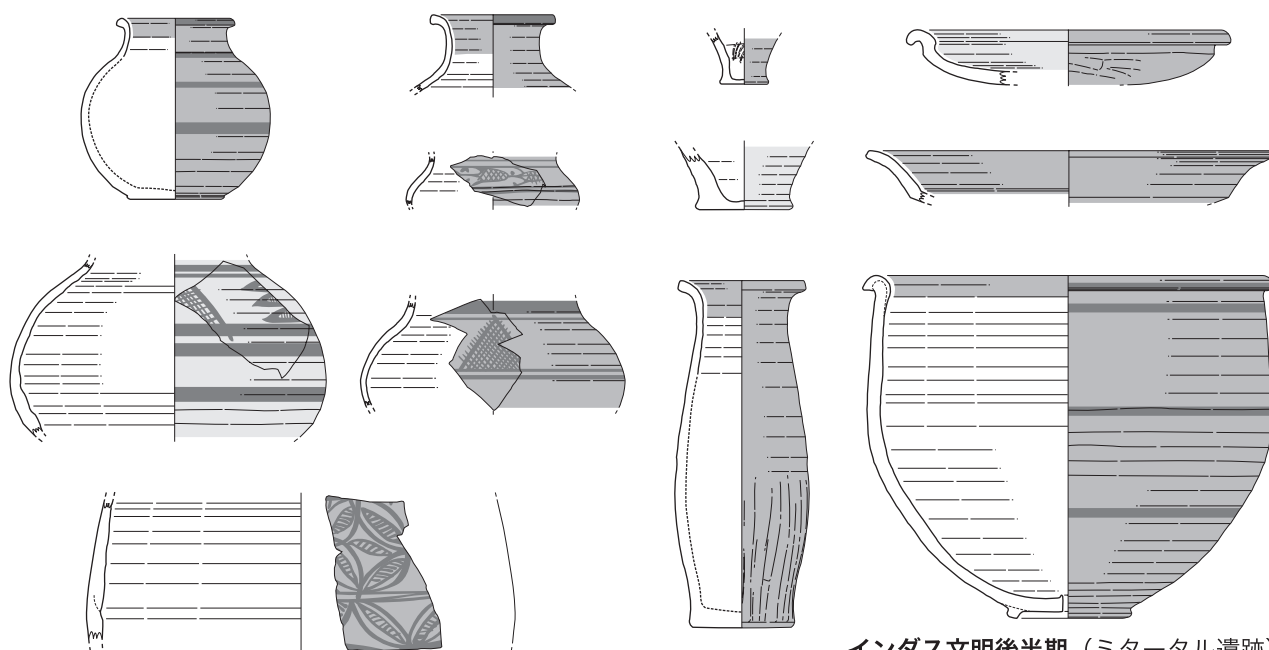


(ファルマーナー遺跡墓地)



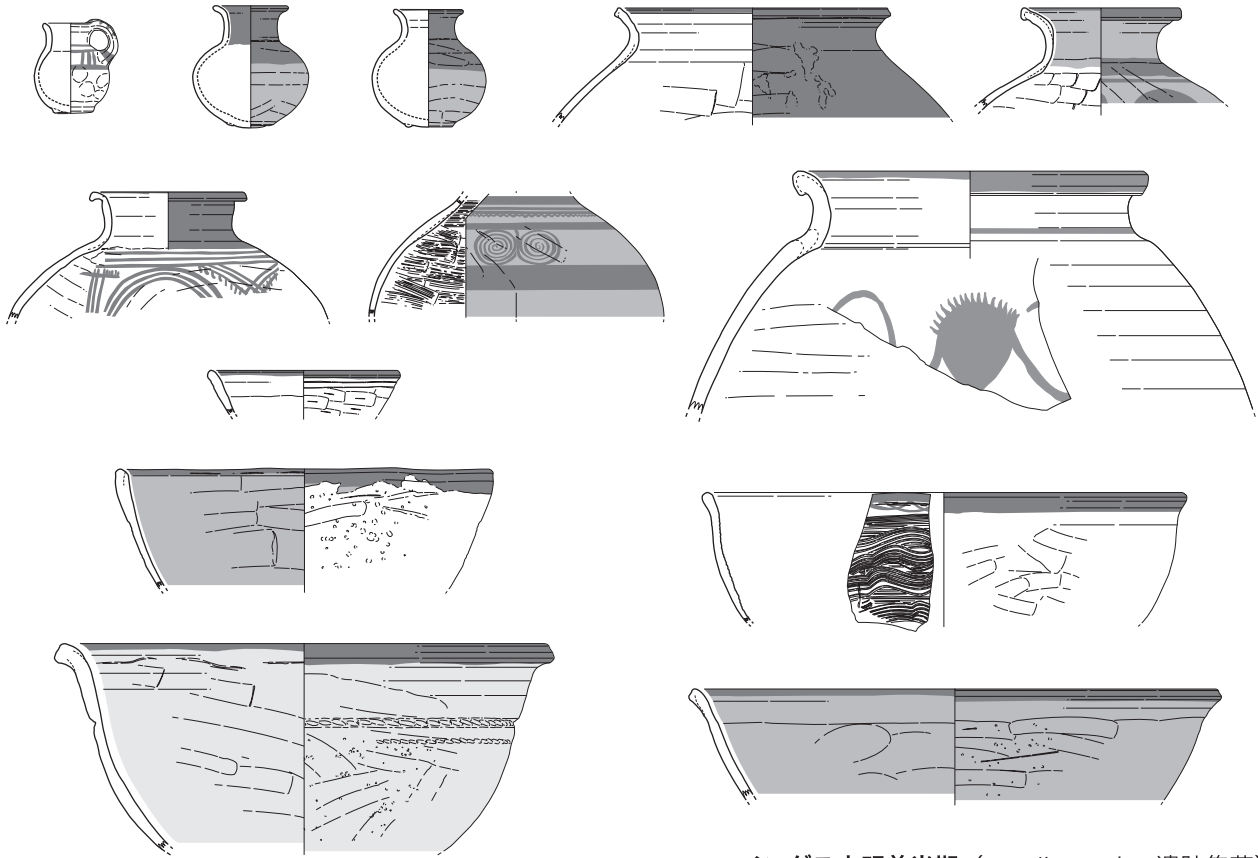
0 20cm

インダス文明前半期 (ファルマーナー遺跡集落)

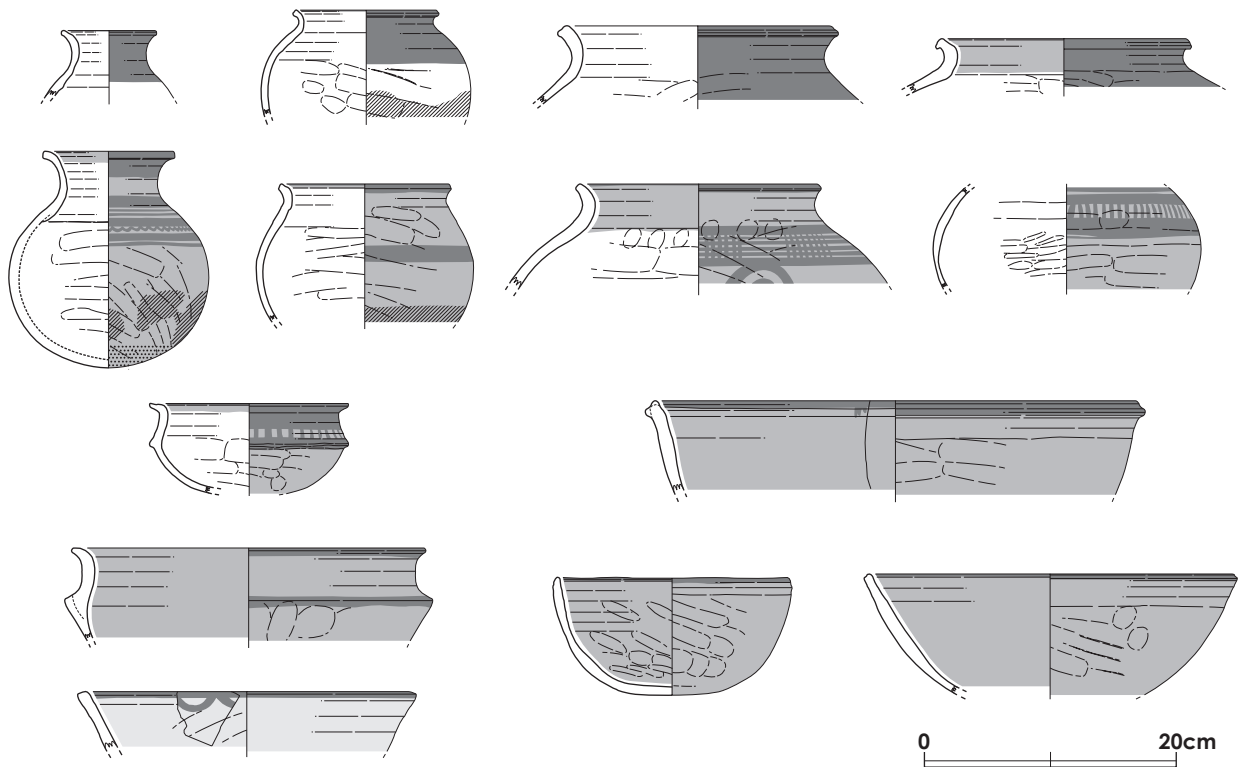


インダス文明後半期 (ミタータル遺跡)

図9 ファルマーナー遺跡およびミタータル遺跡出土のハラッパー式土器 (筆者作成)



インダス文明前半期（ファルマーナー遺跡集落）



インダス文明後半期（ミタータル遺跡）

図10 ファルマーナー遺跡およびミタータル遺跡出土のソーティ=シースワール式土器（筆者作成）

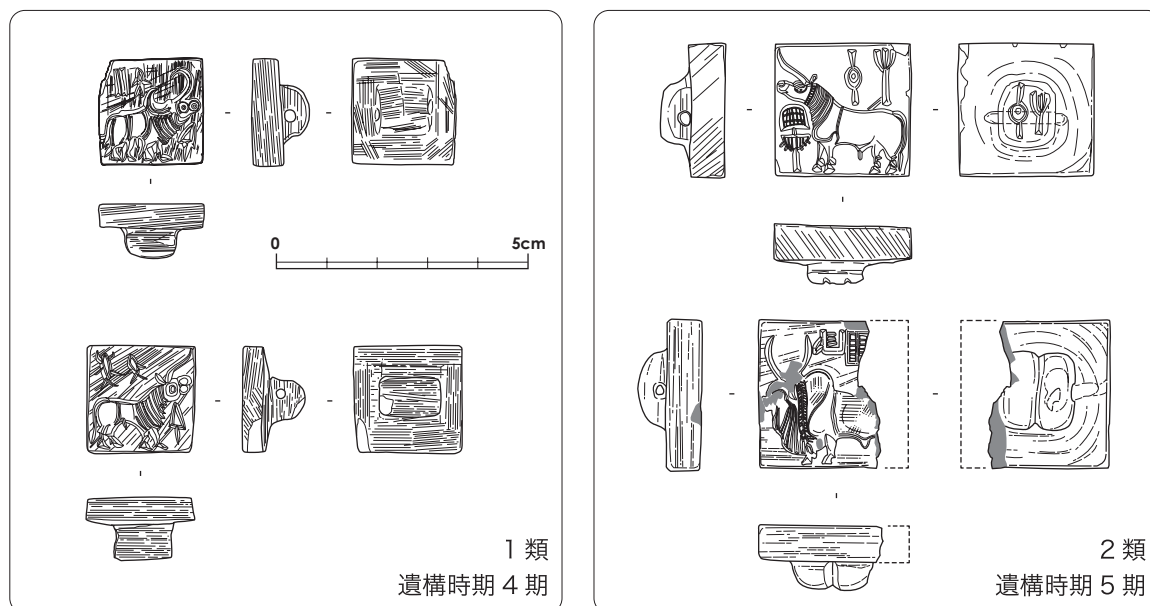


図11 ファルマーナー遺跡 出土印章 (Konasukwa et al. 2011 より筆者作成)

文明期終末からポスト文明期にかけてバーラー式土器 (Bara pottery) と呼ばれる新たな土器様式の成立へと収斂していくことになる。

このことは前半期の二極構造に変化が生じていることを示唆している。前半期のハラッパー系工房ではハラッパー式土器独自の文様を描いていたのに対し、後半期には在地系土器との生産もしくは消費レベルでの交渉の結果、本来の文様体系を失い、在地系の文様を採用するにいたったと考えられる。言い換えると、後半期にはハラッパー式土器の文様に表象される様式的独自性が失われたことができる。こうした在地系土器から取り込まれた文様は続く時期のバーラー式土器に存続しており、ハラッパー式土器の在地化、すなわち特定要素への明確な志向性およびその維持によって支えられた二極構造の解体と再編を示していると考えられる。

印章

インダス文明期の印章は、印面に動物を側面から描いた鈕付方形印章を特徴とする。これを典型インダス式印章と呼ぶことにする。典型インダス式印章は文明期を特徴づける遺物とされ、さまざまな研究が重ねられてきたが、その時期的変遷についてはよくわかっていない。典型インダス式印章の中にもいくつかヴァリエーションがあるが、それらが時期的変化を示すものなのか、地域的変異の結果であるのか、あるいは複数の系統が併存した結果であるのか、不明な点が多い。

ファルマーナー遺跡の調査成果をみると、集落遺構時期4・5期に計4点の典型インダス式印章が出土している

(図7、図11) (Konasukwa et al. 2011)。4期出土の2点は動物が右向きで、インダス文字も限られている。また、鈕が半円筒形を呈するという特徴がある (1類)。一方、5期出土の2点は動物が左向きで、鈕が二重コブ型を呈するという違いがある¹⁰⁾ (2類)。さらに彫刻手法にも違いがあり、動物の胴部でみると4期の2点は断面角形を呈するのに対し、5期の2点は断面丸形を呈している。

こうした違いと出土層位の上下からみて、1類が古いタイプで、2類は新しいタイプである可能性が示唆される¹¹⁾。ハラッパー遺跡でも1類が古い時期 (遺跡編年3A期) に出土し、2類が新しい時期 (遺跡編年3B期) を特徴づけるとされており (Parpola et al. 2010; J. M. Kenoyer氏のご教示による)、1類と2類が時期的先後関係を示す可能性が支持される。

ところが、注目されるのは1類がガッガル平原を中心に分布し、他の地域ではきわめて少なく、2類が主体となる状況である (図12)。ガッガル平原では1類はファルマーナー遺跡のほか、ピッラーナー遺跡 (Rao et al. 2004)、バーナワリー遺跡 (Joshi and Parpola 1987)、カーリーバンガン遺跡 (Joshi and Parpola 1987) で出土している。ファルマーナー遺跡を除くと、いずれも概報レベルでの報告しかなく、出土層位や印章の出土全数など不明であるが、他地域の遺跡では1類の出土数が限定されるのとは対照的である。

こうした状況をどのように解釈するかが問題である。現状ではインダス地域全域における1類の出土数は100点以下で、インダス式印章全体の1割にも満たず、2類が圧倒的に主体を占めている状況である。1類の時期的位置づけ

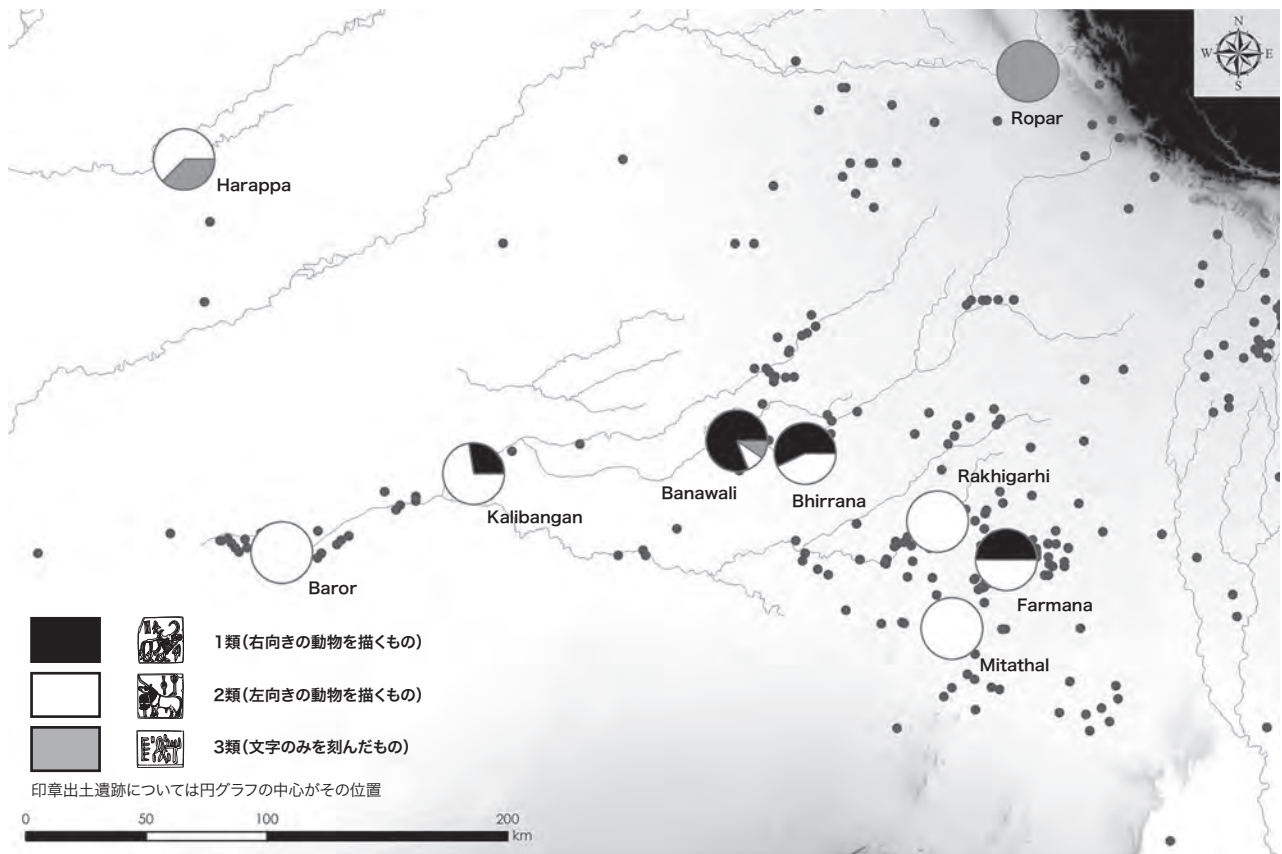


図12 ガッガル平原におけるインダス式印章の分布
(Joshi and Parpola 1987 および Shah and Parpola 1991 の集成をもとに筆者作成)

およびその印章全体における意味も含めて、今後の報告例の増加を俟たざるを得ないが、仮に1類が2類よりも確実に時期的に先行するのであれば、ガッガル平原がインダス式印章の起源地の一角にある可能性も浮上する。

インダス式印章と先行時期の幾何学文印章との間の形態的不連続性は明らかで、幾何学文印章にインダス式印章の起源を求めることは難しい状況にある。ハラッパー遺跡2期には左向きのゾウを刻んだ印章が出土しており、インダス式印章の祖形である可能性があるが、1点のみの出土であり、その厳密な帰属時期も含めて判然としない点が多い。

先行時期の幾何学文印章と断絶を示すインダス式印章出現の背景には、文明社会成立期の地域間関係の再編と器物における表象も含めた観念体系の刷新が想定される。その再編と刷新の母体はハラッパー文化である可能性が高いが、先行するコート・ディジー文化期における地域間の結びつきが文明形成期の社会的基盤になっているのであれば、ハラッパー遺跡を擁するパンジャブ平原に隣接するガッガル平原が文明形成過程において一定の役割を果たしている可能性も無視することはできない。

ハラッパー文化は一般的に印章、チャート製石器群、おもり、土器などによって定義され、その拡散によってイン

ダス文明が成立したと考えられるが、個々の要素ごとにその起源は異なっている可能性も十分にあり、単一の起源地よりも地域間関係が出現の背景にある可能性もある。先文明期終末期以降の地域間交流の実態についての理解を深めていく必要がある。

装身具

文明期の遺跡では、ファルマーナー遺跡およびミタータル遺跡の事例を挙げることができる。

文明前半期のファルマーナー遺跡では集落域から4090点の石製玉類が出土している(図13)。その大半は凍石製で、紅玉髄、瑪瑙、碧玉、アマゾナイトと続く。少量ながらラピスラズリ製玉類も出土している。これらの玉類は首飾や腕飾などの装身具として用いられるものであり、一連に多数の玉の使用が考えられることから、装身具レベルでどの程度の実数であるのかわからないが、相当数の遠隔地産素材の装身具が遺跡に持ち込まれ、消費されていたことは明らかである(図14)。

形態についてみると、凍石製玉類は小形円筒形あるいは薄型円盤形で、一連の装身具中にかなりの数が用いられると考えられる。事実、墓地では多数の凍石製玉類からなる

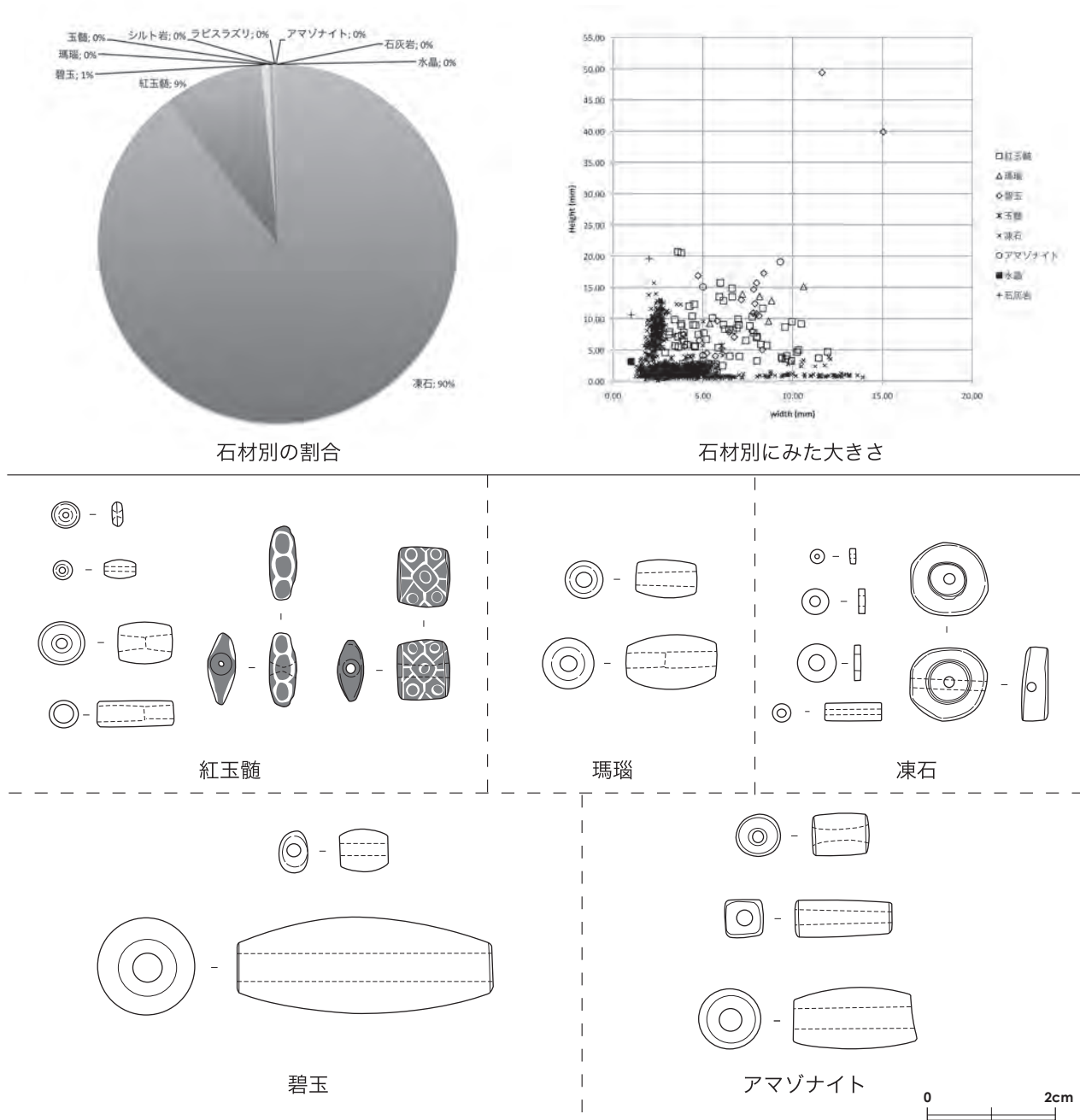


図13 ファルマーナー遺跡 ビーズ (Konasukawa et al. 2011 より筆者作成)

装身具をまとった状態の遺体を確認されており、他の石材を圧倒する出土量はそうした大量装着の結果と考えられる。紅玉髓製玉類も小形のものが中心となっており、凍石ほどではないにしても大量装着型と考えられる。ただし、樽形玉については、墓葬での検出例でみると単体使用であり、小形のものと異なった使用のあり方を示している。瑪瑙・碧玉製玉類は比較的大形の樽形であり、単体もしくは少数での装着が原則であったと考えられる。墓葬でも単体使用の例が確認されている。ラピスラズリは小形のものが中心だが、出土数が限られているところからみてきわめ

て限定的な流通・消費形態であったと考えられる。これは産地が他の石材よりも離れていることも一つの要因となっていると推定される。

集落域では瑪瑙製の玉未成品および剥片が少量ながら出土しており（図7）、小形玉類の製作が行われていた可能性が高い。紅玉髓・瑪瑙・碧玉などの比較的大形の玉類ではドリル穿孔が行われているが、紅玉髓製の小形玉は敲打技法による穿孔で、ドリル穿孔に比べて技術的難度の低い穿孔技術が用いられていることがわかる。また、ドリルは出土しておらず、こうしたことを勘案すると集落内で素材

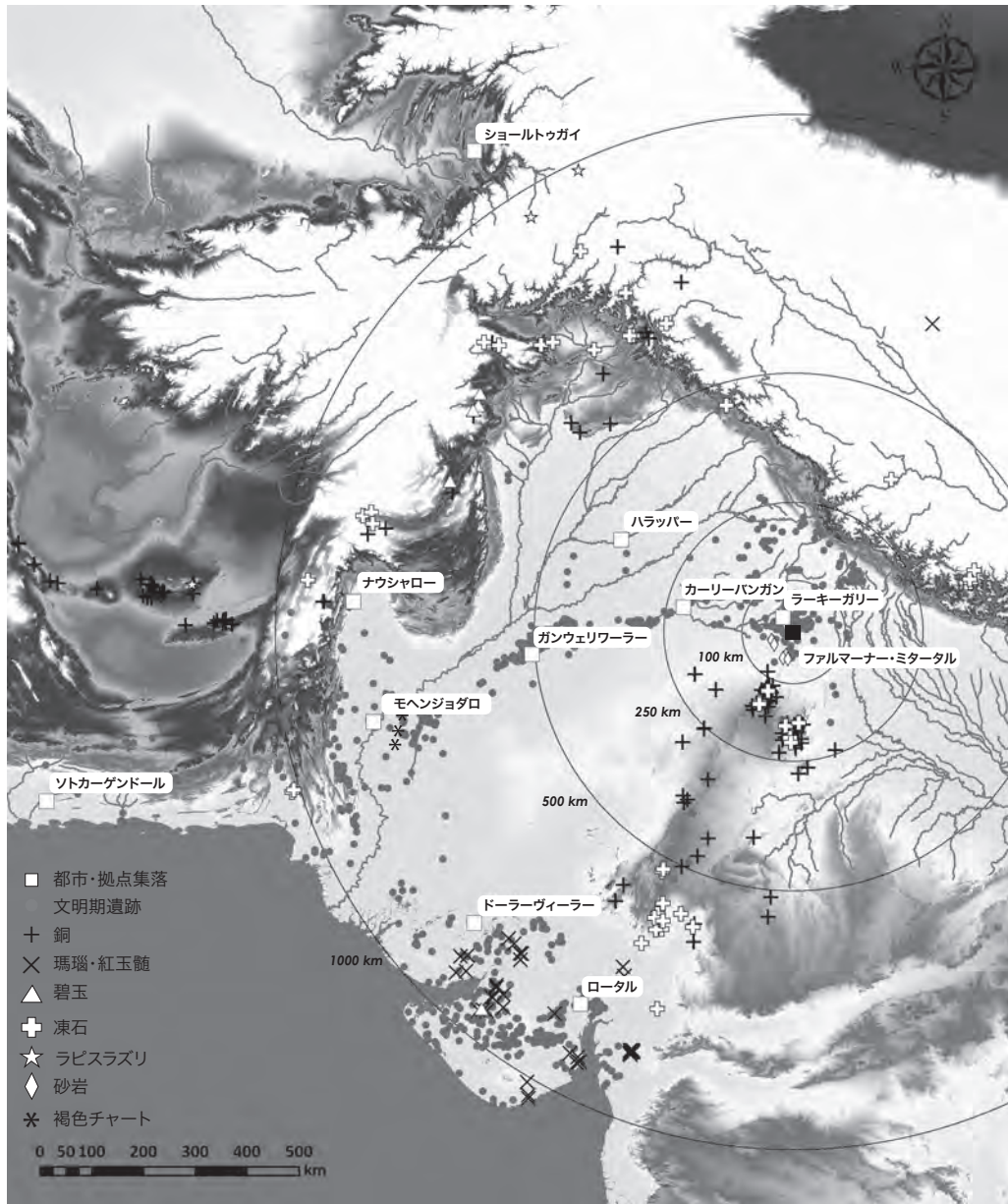


図 14 工芸品素材の分布（筆者作成）

からの加工が行われる小形玉類と完成品のかたちで搬入される大形玉類という、2つの異なる装身具生産・流通の仕組みが併存したことを示している。

文明後半期に位置づけられるミタータル遺跡でも同様に、凍石、紅玉髄、瑪瑙、碧玉製玉類が出土している。形態的な差異もファルマーナー遺跡同様で、素材によって装着方法および価値付けが異なっていたと考えられる。また、ミタータル遺跡でも瑪瑙製の玉未成品および剥片が出土しており、この時期においても小形玉類の製作が遺跡内で行われていたことがわかる。

次に石製と並んで装身具に用いられたファイアンスについてみてみよう。ファルマーナー遺跡では玉と腕輪が出土

している。玉が47点、腕輪が11点で、石製に比べるとはるかに限定的で、石製が装身具全体で主体となっていたことを示している。腕輪は青色ファイアンスで、外面に沈線による装飾を施したものが多い。玉についてみると、青色ファイアンスのほかに赤色のものや紺青色、黒色といった色調のものが含まれるとともに、異なる着色剤を併用した縞状玉類も出土している。形態的にも瑪瑙・碧玉製玉類に類似しており、模倣品である可能性が高い。

ミタータル遺跡が相当する文明後半期からファイアンス製装身具が顕著に増加する傾向が認められる。このファイアンス製装身具の増加は文明終末期からポスト文明期にかかる時期まで続く現象であり、石製に代わってファイアン

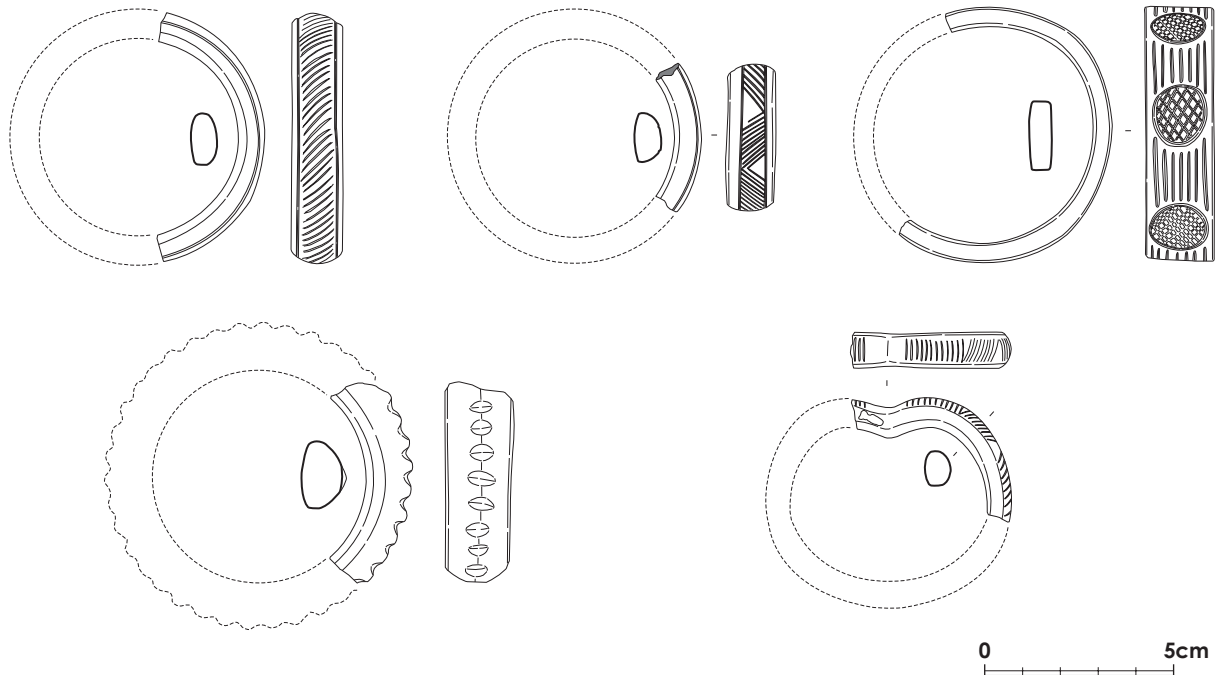


図15 ミタータル遺跡 ファイアンス製腕輪 (筆者作成)

ス製が装身具の主体となったことが推定される。ただし、この増加時期における主体は腕輪であり（図15）、玉類によって構成される装身具から腕輪主体の構成への転換も同時に生起している可能性がある。また、玉類の中にはファルマーナー遺跡同様に縞状を呈するものがあり、青色という独自の色調を有するもののほかに石製の模倣という志向性もファイアンス製玉類に付与されていたことがわかる。腕輪は外面に沈線による装飾を施すものが大半で、ファルマーナー遺跡出土例に同様の特徴をもつ。

装身具組成における腕輪の主体化という現象に関連して注目されるのは、ファルマーナー遺跡では土製腕輪が大量に出土し、ファイアンス製腕輪はきわめて限られるのに対し、ミタータル遺跡では土製よりもファイアンス製の方が圧倒的に多いという状況である。ミタータル遺跡では土製も一定数出土していることから、土製腕輪自体がなくなったわけではないが、ファイアンス製の主体化はきわめて重要である。というのも土製腕輪はきわめて簡便な製作技法によるものであるのに対し、ファイアンス製はその素材の調達、調合、成形、焼成などの工程においてははるかに複雑な技術体系を基盤としているからである。したがって、単に素材の転換のみならず、生産・流通体制の再編が行われている可能性が高いと考えられる。

5. ポスト文明期の様相

居住空間

ポスト文明期における居住空間はほとんどわかっていな

い。若干遺構が検出されている遺跡をつなぎあわせてみると、まずミタータル遺跡では前2000年頃までに日干煉瓦積建物は廃絶し、土坑群のみが検出されるようになる（図8右）（Manmohan Kumar et al. 2012）。こうした状況は遺跡内の一地点にとどまる現象ではなく、広範な範囲で確認されており、仮に文明期集落外への煉瓦積建物からなる居住域の移転を想定するにしても、文明期に形成された都市的居住空間の廃絶と土坑群への変化はこの時期における集落構造の大転換を示している。少なくともミタータル遺跡では前2300年頃から煉瓦積建物からなる都市的居住空間が300年近くに及んで展開していたことを考えると、その廃絶はそれまでの集落にとってきわめて大きな意味をもつことは確かである。

バナーワリー遺跡では、ポスト文明期になって周壁が廃絶するとともに、居住域が散在化すると報告されている（Bisht 1982; Bisht and Asthana 1979）。それまでの居住空間の廃絶と居住形態の転換はミタータル遺跡と同様のパターンであり、ポスト文明期の早い段階において、こうした現象が広い範囲で生じていた可能性が高い。

前1500年頃以降に位置づけられるバグワンプラ（Bhagwanpura）遺跡では掘立柱式小屋状建物と独立して存在する日干煉瓦積建物が検出されている（Joshi 1993）。日干煉瓦の使用は散在的に続いていた可能性もあるが、文明期のような都市的居住空間の形成とは無縁であり、そうした散在型居住空間がポスト文明期初頭以降確立していたことを示している。同様に前1500年以降に位置

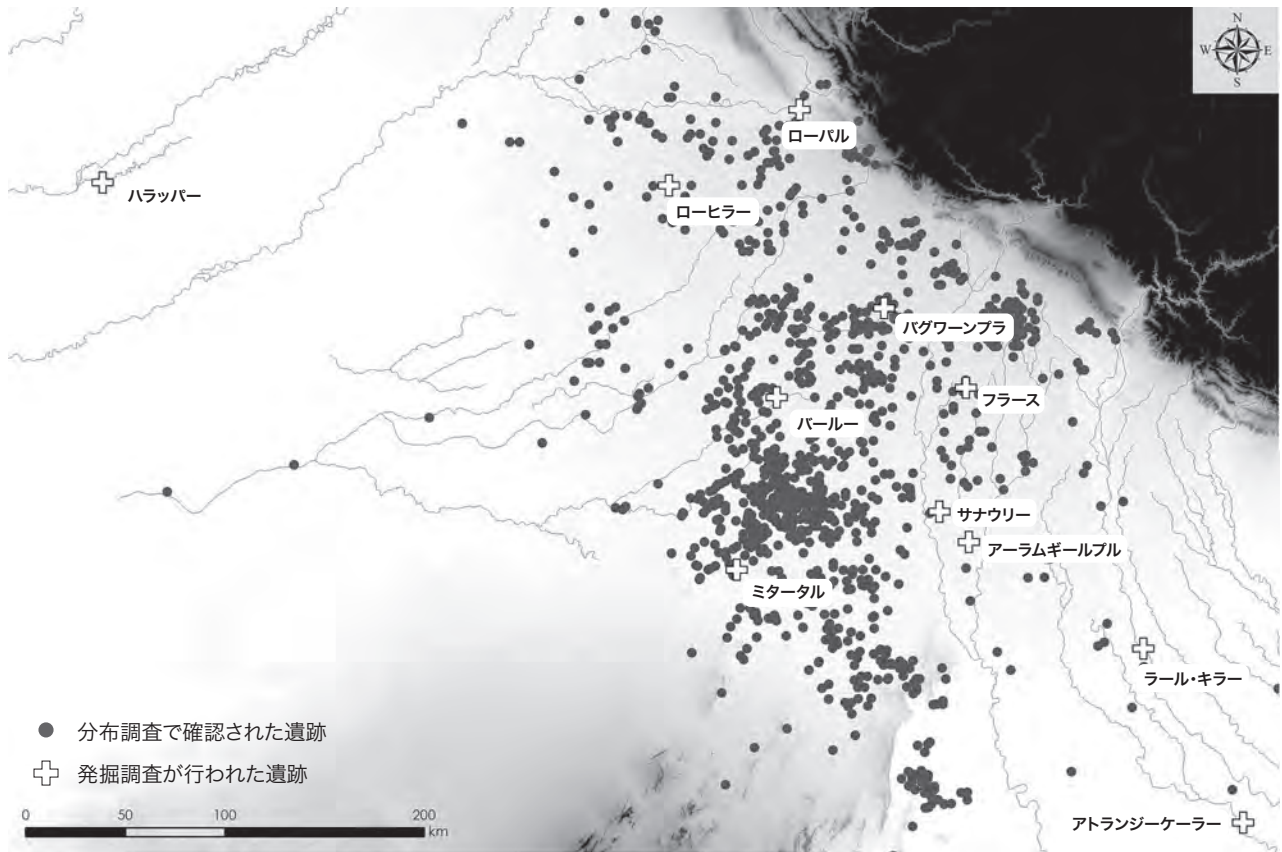


図 16 ポスト・インダス文明期の遺跡の分布（筆者作成）

づけられるマディナ 2 (Madina-2) 遺跡でも掘立柱式建物の存在が推定されており (Manmohan Kumar et al. 2009)、散在型居住空間は広域にポスト文明期を特徴づけるものであったと考えてよいであろう。

前 2000 年頃以降における居住空間の大転換は都市あるいは大規模集落の衰退と軌を一にしたもので、また一体的に連動したものと考えられる。ガッガル平原ではポスト文明期に集落数が増加することが知られているが (図 16) (上杉 2010b)、大規模集落の解体によって都市住民の周辺への分散と新集落の建設が進んだことによる可能性が高い。多数の小規模集落によって特徴づけられるポスト文明期の社会は集落の機能によって差異化された文明期の階層的な地域構造と異なっていることは確実で、散在型居住空間はそうした当該期の社会構造と関連するものと考えられる。

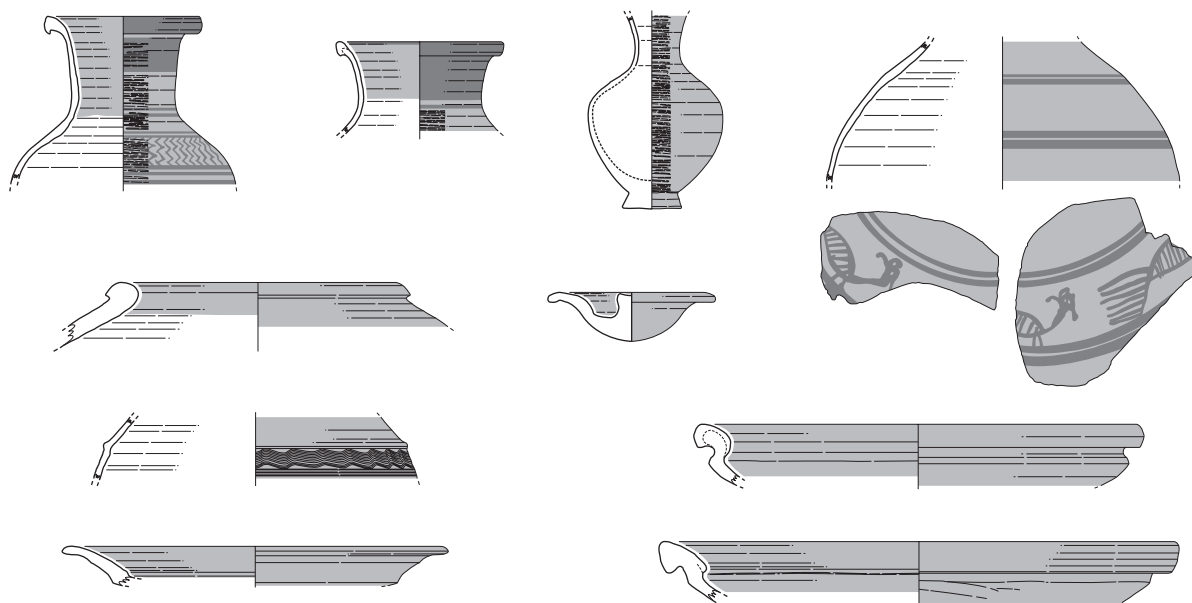
居住空間に関係する事例として、ベッドワー 2 (Bedwa-2) 遺跡について若干述べておく。この遺跡は砂丘上に築かれた墓地遺跡で、周辺に同時期の集落遺跡は確認されていない。発掘調査はされておらず表面採集資料のみによる検討ながら (図 17)、墓地の時期は文明後半期からポスト文明期前半と考えられる。実際に周辺に集落が存在しないのであれば、文明期のファルマナー遺跡のように都市的集落と墓地が比較的近い位置で組み合わさるのではな

く、分散した複数の小規模集落に共有される墓地が成立した可能性も考えられ、集落と墓地という関係が文明期からポスト文明期へとどのように変化したのか重要な研究課題を提起している。

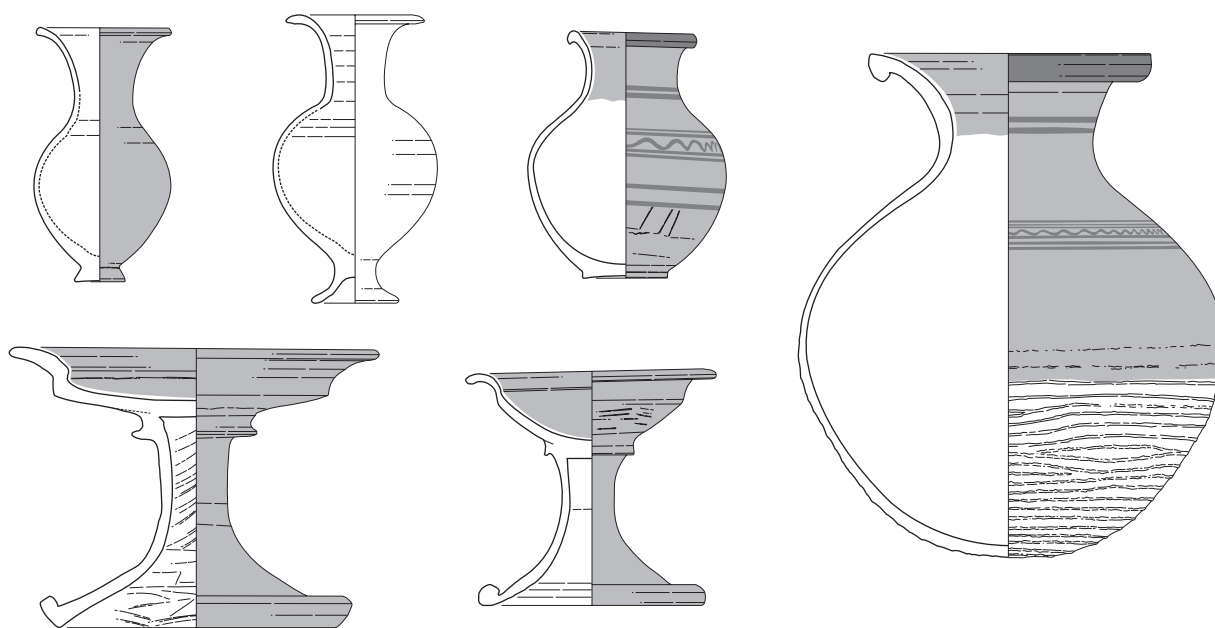
ヤムナー川の東に位置するサナウリー (Sanauli) (遺跡も同様に文明期終末以降の墓地で、土坑墓を中心としてさまざまな墓葬が明らかにされている (Sharma et al. 2006)。ベッドワー 2 遺跡同様に集団墓地という埋葬空間がポスト文明期にも存続していたことを示す重要な事例であり、文明社会の衰退と埋葬行為に関わる空間利用のあり方という 2 つの現象の関係を考える上で重要である。

土器

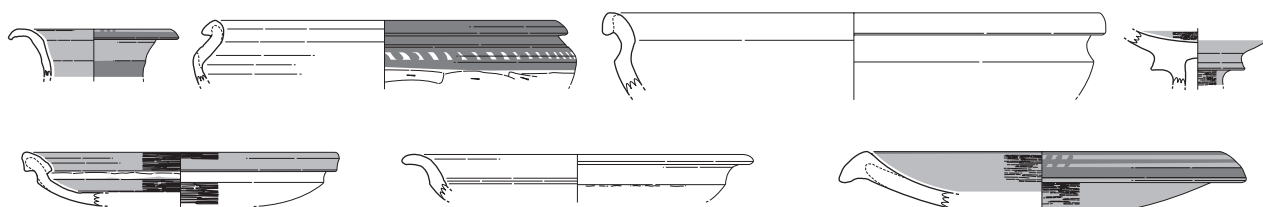
ガッガル平原のポスト文明期を特徴づけるとされるバーラー式土器は、ハラッパー式土器を母体としながらも在地土器の要素を取り込みつつ成立した土器様式である¹²⁾ (図 17)。その成立年代を特定するには多くの検討を要するが、文明後半期にハラッパー式土器の変化が顕在化し、前 2000～前 1900 年頃には成立したと推測される。ミタータル遺跡の資料でみるとハラッパー式土器からバーラー式土器への変化は漸移的であり、かつガッガル平原各地の資料を瞥見するかぎり同様の変化はガッガル平原全体で起こっ



ミタータル遺跡



ベードワー 2 遺跡



マディナ 2 遺跡

0 20cm

図 17 パーラー式土器 (筆者作成)

ているようである。

確実にバーラー式土器として判断できる資料にもとづくと、この土器の分布はサトレジ川南岸からガッガル川流域、チョウタンダ川流域に及んでいる。ただし、ガッガル平原西半部ではポスト文明期の遺跡自体が少なく、報告も皆無に等しいことから、バーラー式土器はほとんど分布しなかった可能性がある。少なくともバロール遺跡やカーリーバンガン遺跡ではポスト文明期の文化層は確認されていない。

注目されるのは、バーラー式土器の影響を受けたと考えられる赭色土器の分布である。文明期後半期には、ヤムナー川とガンガー（Ganga）川に挟まれるドーアブ（Doab）地域にハラッパー文化の要素をもった遺跡が出現するが、ポスト文明期にはバーラー式土器と関連する赭色土器が出土する遺跡が広く分布する。さらに赭色土器の遺跡はガンガー平原西半部にも及んでおり、ガッガル平原東半部からガンガー平原西半部に及ぶ地域に一つの交流圏が成立する。いわゆる埋納銅器文化は、この時期のバーラー式土器＝赭色土器交流圏で生じた文化現象である。

都市、拠点集落の衰退によって人口の拡散が生じた可能性を指摘したが、おそらくこの現象に伴う人口移動の波はヤムナー川を越えてガンガー平原にまで及んだと考えられる。前3千年紀のガンガー平原における在地文化の実態がまったくわかっておらず、ポスト文明期における社会・文化の動向にガンガー平原の在地文化がどのように関わっているのか不明であるが、ガッガル平原とガンガー平原西半部に成立した一つの交流圏はこの時代の大きな特徴である。それは拠点集落を介して重層的、垂直的につながる文明期の社会とは異なり、人の移動・拡散と新規集落の建設によって拡大する面的なネットワークであった可能性がある。

装身具

ポスト文明期に関してミタータル遺跡の資料についてみると、この時期の装身具はファイアンス製を主体とし、少量の石製が加わるという組成であるが、ファイアンス製が腕輪を主体とするのに対し、石製は玉類のみである。石製には紅玉髄、瑪瑙、碧玉が確認できるが、その特徴は先行時期に同様である。ファイアンス製腕輪の特徴も先行時期のものに共通している。

ミタータル遺跡のポスト文明期の文化層の年代については¹⁴C年代によって前1950年頃の年代値を含むことが明らかであるが、遺跡における居住の完全な廃絶の年代については不明である。ただし、出土土器でみると、バーラー式土器の中でも古い段階に位置づけられる可能性が高く、前1900～前1500年頃の幅をもつポスト文明期の中でも、

前半期に属すると推定できる。

遠隔地由来の石製装身具がいつの時期までガッガル平原に搬入されていたのか、文明社会の衰退現象を考える上でもきわめて重要な点であるが、資料の現状では想像すらできない状況にある。少なくともミタータル遺跡の調査成果によれば、ポスト文明期前半までは遠隔地素材の流通を可能とする交易ネットワークが機能していた可能性がある。

6. まとめ

以上、さまざまな要素について先文明期からポスト文明期にかけての様相について検討してきた。以下の諸点がガッガル平原における文明社会の成立と衰退の過程として挙げられるだろう。

- 1) ガッガル平原における先文明期は現状ではインダス地域全体の先文明期の中でも後半期に位置づけられる。黒色帯土器自体は西のパンジャブ平原との関係の中で出現した可能性が高く、前4千年紀にさかのぼる遺跡が存在する蓋然性は極めて高いが、現状では明確にし得ない。
- 2) 前3千年紀前葉の段階には、在地土器とコート・ディジー式・系土器が分布しており、ガッガル平原社会に二極構造が成立する。両者の特徴が併存する土器も存在していることから、両者は単に併存するだけでなく、交流関係があったと考えられる。土器以外では判然としない点が多いが、幾何学文印章の分布は二極構造を介してガッガル平原が広域ネットワークの中に取り込まれていたことを示しており、広域性によって支えられる文明社会の基盤が形成されつつあったことを示している。
- 3) 文明期にはハラッパー文化がガッガル平原に流入する。ハラッパー文化の成立はハラッパー遺跡の年代によって前2600年頃とされるが、ファルマナー遺跡では前2500年頃の年代が得られており、比較的短期間のうちにハラッパー文化がガッガル平原の奥深くにまで入り込んだことを示している。ハラッパー文化自体はシンド地方およびパンジャブ地方を核として出現した文化と考えられ、先行時期にガッガル平原に入り込んでいたコート・ディジー文化が地域内でハラッパー文化に変化したのではなく、コート・ディジー文化とは別に再度西方からハラッパー文化が流入したと考えられる。
- 4) 文明社会の広域ネットワークに深く関わるインダス式印章の起源については不明な点が多いが、古相を示す印章の分布はハラッパー式土器などの要素とは別個にインダス式印章が創出された可能性も示唆している。その一角にガッガル平原の社会が関わっていた可能性

もある。

- 5) 密集型居住空間を形成する集落は、ハラッパー文化の流入、すなわち西方からの人口移動を背景にして出現した可能性が高い。そこでは印章のほかに石製装身具やおもり、ローフリー丘陵産チャート製収穫具など、広域交易活動抜きでは説明できない器物が搬入され、文明社会を表象し、支える拠点となった。一部は周壁によって囲まれた閉鎖的・管理的空間であった。ただし、文明期の集落はハラッパー文化の要素のみで満たされるのではなく、ハラッパー式土器に並んで在地土器も用いられており、拠点集落は地域社会の結節点としても機能していたと考えられる。
- 6) 都市社会の仕組みと生活様式は文明後半期にも維持されたが、ハラッパー文化の在地化あるいは在地文化の主導化により、二極構造は解体し、地域社会の様態は大きく変化する。土器にみられる変化やファイアンス製装身具の増加はこうした社会の変化を反映したものと考えられる。こうしたハラッパー文化の在地化は新段階のハラッパー式彩文土器 (Quivron 2000; 上杉・小茄子川 2008) がガッガル平原ではほとんど出土していないことにも窺われる。古段階あるいは中段階のハラッパー式彩文土器は確認できるが、新段階の彩文土器が出土しないのは、この時期にハラッパー式土器が在地化し、パンジャブ地方やシンド地方のハラッパー式彩文土器から独立した変化をたどるようになったことが原因の一つである可能性がある。
- 7) 文明の衰退原因はいまだ特定されていないが、自然環境の変化と社会変化が重層的に連動したものと考えられる。社会的要因についてみれば、ハラッパー文化の在地化が一つの契機になっていると推定される。二極構造はそもそも地域間を結びつける動因としての広域志向性をもつハラッパー文化の存在によって支えられるものであったが、ハラッパー文化の在地化はそうした広域志向性の弛緩あるいは喪失に関連すると考えられるためである。このハラッパー文化の在地化自体、別の事象の結果である可能性が高いが、いずれにせよ二極構造の解体は文明社会を支える柱の一つであった広域交流ネットワークの解体を引き起こすことになったのであろう。ただし、それが都市の衰退とどのように関わるのかはまた別の視点からの考察が必要である。
- 8) 文明社会の衰退によって生じた人口移動の波はガッガル平原での遺跡数の増加のみならず、東のガンガー平原への人口拡散を引き起こした。銅器埋納行為のように新たな文化表象も出現しており、新たな統合原理に基盤を置く地域社会へと変貌したと考えられる。

依然としてガッガル平原における考古学研究は端緒にいたっており、その歴史的意義を十分に理解するには程遠い状況にある。いかに網羅的に資料を蓄積し、研究の俎上に挙げていくかが緊要な課題である。

謝辞

本稿の作成にあたっては、以下の方々から多くのご教示をいただきました。また、査読にあたってくださった方々からは多くの重要なご指摘を賜りました。末筆ながら御礼申し上げます (敬称略、アルファベット・五十音順)。

R. S. Bisht, V. Dangi, J. G. Jamison, M. Kenoyer, Manmohan Kumar, V. Shinde, 遠藤 仁、長田俊樹、小茄子川歩、清水康二、中井 泉、長柄毅一、山花京子

註

- 1) ガッガル平原における文化変遷についてはその概略を別稿において検討したことがある (上杉 2009)。本稿はその成果を基礎として、その後の研究成果を盛り込んでまとめたものである。あわせて参照されたい。
- 2) 近年、インド人研究者のなかには、インダス=サラスヴァティー文明 (Indus-Sarasvati Civilization) と呼ぶ研究者が多くなっている。
- 3) 2009年までに発掘調査が行われた遺跡については、(上杉 2010a) にその概要をまとめている。あわせて参照されたい。
- 4) ギラーワル遺跡で採取した年代測定サンプルはいずれも遺構出土の炭化材であるが、Pit no.35 採取試料の年代が $1\sigma=2695\text{BC}$ (46.9%) $2\sigma=2780\text{BC}$ (70.7%) 2569BC 、Pit no.23 (土器焼成窯) 採取資料の年代が $1\sigma=4169\text{BC}$ (22.4%) 4127BC 、 $2\sigma=4235\text{BC}$ (89.1%) 4037BC である。
- 5) 本稿では「コート・ディジー式土器」と「コート・ディジー系土器」という2つの用語を用いる。コート・ディジー式土器はシンド地方のコート・ディジー遺跡出土資料を標式として設定された型式で、多少の地域性はみられるものの、おおむね一様と考えられる土器群がパンジャブ地方からゴーマル=バンヌー地方にまで分布する。これに対してガッガル地方では上記の地域のものに同一と判断される資料も確認されるものの、一方でコート・ディジー式土器の要素を一部有する資料が存在しており、それらをコート・ディジー式土器の影響を受けた土器群として判断し、コート・ディジー系土器と呼ぶことにする。ただし、インダス地域全体に及んで「式」と「系」を峻別できるほど、各遺跡からの出土資料の公開は進んでおらず、将来的により厳密な検討が必要である。
- 6) ファルマーナー遺跡集落域については、深堀トレンチの層序をもとに5時期に区分できるが、最下層から最上層まで一貫してハラッパー式土器が出土しており、文明期になって居住が開始された遺跡である可能性がきわめて高い。14C年代測定値で見ると、前2500～前2300年頃の年代を示しているが、土器で見ると遺構時期1期がハラッパー遺跡3A期=ハラッパー式土器古段階、遺構時期2～5期がハラッパー遺跡3B期=ハラッパー式土器中段階におおむね相当すると考えられる。ただし、土器の変化は漸移的であり、明確に時期区分を設定するのは難しい状況にある。
- 7) ファルマーナー遺跡墓地は出土土器からみて4つの時期に分けることができる。この時期区分は墓壇の重複関係によっても一部確認されている。この区分によれば、墓地1期がハラッパー

- 遺跡 3A 期 = ハラッパー式土器古段階、墓地 2・3 期がハラッパー遺跡 3B 期 = ハラッパー式土器中段階、墓地 4 期がハラッパー遺跡 3B 期もしくは 3C 期 = ハラッパー式土器中・新段階に対応すると考えられる。
- 8) ミタータル遺跡は 3 つのマウンドからなるが、それぞれで異なる遺構時期が確認されている。土器でみれば、3 時期に区分することが大別でき、1・2 期がハラッパー遺跡 3C 期 = ハラッパー式土器新段階、3 期が文明終末期からポスト文明期初頭に位置づけられる。ただし、ファルマーナー遺跡同様に土器の変化は漸移的である。
- 9) Manmohan Kumar 氏のご教示による。
- 10) ただし、5 期からの出土品のうち、1 点は典型的な二重コブ型であるが、もう 1 点は隅丸方形でその上面にインダス文字を刻む。ただし、印面の彫刻の特徴から 2 類とすることに問題はない。
- 11) 印章の編年研究の難しさは、単に調査・記録精度の問題だけでなく、製作時から廃棄時までの時間幅やその期間内での製作地点から廃棄地点までの移動距離が一定しないことにもよっている。つまり、印章は世代を超えて用いられた可能性が高く、固定された空間にとどまる性格のものでもない。墓からインダス式印章が出土した例がないことも、印章が特定個人に限定して使用されたのではなく、数世代にわたってに使用された可能性を示唆している。したがって、印章研究においては印章製作工房の特定や印章の形態的・技術的特徴の微細検討が不可欠となる。
- 12) パーラー式土器に関しては、Y. D. Sharma による研究がある (Sharma 1982)。彼によれば、パーラー式土器は先文明期の土器伝統に属するものであるとする。この見解は多分に彩文に拠ったものであるが、確かに彩文でみるとソーティ = シースワール式土器の要素がパーラー式土器の中に存在している。しかしその一方で、ハラッパー式土器の彩文要素もまたパーラー式土器に見出すことができ、器形・製作技法においてはハラッパー式土器の要素が色濃くみられる。つまり、パーラー式土器はハラッパー式土器とソーティ = シースワール式土器の双方の要素を兼ね備えており、両者の伝統が融合した中から成立した土器と考えられる。
- 参考文献
- Bisht, R. S. 1982 Excavations at Banawali, 1974-77. In G. L. Possehl (ed.) *Harappan Civilization: A Contemporary Perspective*, 113-124. Delhi, Oxford & IBH.
- Bisht, R. S. and S. Asthana 1979 Banawali and Some Other Recently Excavated Harappan Sites in India. In M. Taddei (ed.) *South Asian Archaeology 1977*, 225-240. Naples, Istituto Universitario Orientale.
- Dikshit, K. N. 1984 The Sothi Complex: Old Records and Fresh Observations. In B. B. Lal and S. P. Gupta (eds.) *Frontiers of the Indus Civilization*, 531-537. New Delhi, Indian Archaeological Society/Books & Books.
- Gupta, S. P. 1996 *The Indus-Saraswati Civilization: Origins, Problems and Issues*. Delhi, Pratibha Prakashan.
- Joshi, J. P. 1993 *Excavation at Bhagwanpura 1975-76 and Other Explorations & Excavations 1975-81 in Haryana, Jammu & Kashmir and Punjab*. Memoirs of the Archaeological Survey of India No.89. New Delhi, Archaeological Survey of India.
- Joshi, J. P. and A. Parpola 1987 *Corpus of Indus Seals and Inscriptions: 1. Collections in India*. Helsinki, Suomalainen Tiedekatemia.
- Kenoyer, J. M. 1998 *Ancient Cities of the Indus Valley Civilization*. Karachi, American Institute of Pakistan Studies/Oxford University Press.
- Kenoyer, J. M. 2001 Wealth and Socioeconomic Hierarchies of the Indus Valley Civilization. In J. Richards and M. V. Buren (eds.) *Order, Legitimacy and Wealth in Ancient States*, 88-109. Cambridge, Cambridge University Press.
- Kenoyer, J. M. 2005a Bead Technologies at Harappa, 3300-1900BC: A Comparative Summary. In C. Jarrige and V. Lefèvre (eds.) *South Asian Archaeology 2001*, 157-170. Paris, Editions Recherche sur les Civilisations.
- Kenoyer, J. M. 2005b Culture Change during the Late Harappan Period at Harappa. In E. F. Bryant and L. L. Patton (eds.) *The Indo-Aryan Controversy: Evidence and Inference in Indian History*, 21-49. London/New York, Routledge.
- Kesarwani, A. (2002) *Excavation at Balu*. Kurukshetra, Nirmal Book Agency.
- Khatri, J. S. and M. Acharya 1995 Kunal: A New Indus-Saraswati Site. *Purātattva* 25: 84-85.
- Konasukawa, A., H. Endo and A. Uesugi 2011 Chapter 7 Minor Objects from the Settlement Area. In V. Shinde, T. Osada and Manmohan Kumar (eds.) *Excavations at Farmana, District Rohtak, Haryana, India. 2006-2008*, 369-529. Kyoto, Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature.
- Lal, B. B., B. K. Thapar, J. P. Joshi and M. Bala 2003 *Excavations at Kalibangan: The Early Harappan (1960-69)*. Memoirs of the Archaeological Survey of India no.98. New Delhi, Archaeological Survey of India.
- Manmohan Kumar, V. Shinde, A. Uesugi, V. Dangi, Sajjan Kumar and Vijay Kumar 2009 Excavations at Madina, District Rohtak, Haryana 2007-08: A Report. In T. Osada and A. Uesugi (eds.) *Occasional Paper 7: Linguistics, Archaeology and the Human Past*, 77-177. Kyoto, Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature.
- Manmohan Kumar, A. Uesugi, V. S. Shinde, V. Dangi, Vijay Kumar, Sajjan Kumar, A. K. Singh, R. Mann and Rajesh Kumar 2011 Excavations at Mitathal, District Bhiwani (Haryana) 2010-11: A Preliminary Report. *Purātattva* 41: 168-178.
- Manmohan Kumar, A. Uesugi, V. Dangi and Vijay Kumar 2012 Excavations at Mitathal 2011-12. *Purātattva* 42: 148-181.
- Meadow, R. H. and J. M. Kenoyer 1994 Harappa excavations 1993: the city wall and inscribed materials. In A. Parpola and P. Koskikallio (eds.) *South Asian Archaeology 1993*, 451-470. Helsinki, Suomalainen Tiedekatemia.
- Mughal, M. R. 1997 *Ancient Cholistan: Archaeology and Architecture*. Lahore, Ferozsons.
- Nath, A. 1998 Rakhigarhi: A Harappan Metropolis in the Sarasvati-Drishadvati divide. *Purātattva* 28: 39-45.
- Nath, A. 1999 Further Excavations at Rakhigarhi. *Purātattva* 29: 46-49.
- Nath, Amarendra 2001 Rakhigarhi: 1999-2000. *Purātattva* 31: 43-46.
- Parpola, A., B. M. Pande and P. Koskikallio 2010 *Corpus of Indus Seals and Inscriptions: Volume III: New Material, Untraced Objects, and Collections outside India and Pakistan*. Helsinki, Suomalainen Tiedekatemia.
- Quivron, G. 2000 The Evolution on the Mature Indus Pottery Style in the Light of the Excavations at Nausharo, Pakistan. *East and West* 50 (1-4): 147-190.
- Rao, L. S., N. B. Sahu, Prabhaskar Sahu, U. A. Shastri and S. Diwan 2004 Unearthing Harappan settlement at Bharrana (2003-04). *Purātattva* 34: 20-24.
- Rao, L. S., N. B. Sahu, S. Diwan, P. Sahu and U. A. Shastri 2005 New Light

- on the Excavation of Harappan settlement at Bhirrana. *Purātattva* 35: 60-68.
- Rao, L. S., N. B. Sahu, U. A. Shatry, P. Sahu and S. Diwan 2006 Bhirrana Excavation: 2005-06. *Purātattva* 36: 45-49.
- Sant, U., T. J. Baidya, N. G. Nikoshey, N. K. Sinha, S. Nayan, J. K. Tiwari and A. Arif 2005 Baror - A New Harappan Site in Ghaggar Valley - A Preliminary Report. *Purātattva* 35: 50-59.
- Shah, S. G. M. and A. Parpola 1991 *Corpus of Indus Seals and Inscriptions 2. Collections in Pakistan*. Helsinki, Suomalainen Tiedeakatemia.
- Sharma, D. V., K. C. Nauriyal, V. N. Prabhakar 2006 Excavations at Sanauli 2005-06: A Harappan Necropolis in the Upper Ganga-Yamuna Doab. *Purātattva* 36: 166-179.
- Sharma, Y. D. 1982 Harappan Complex on the Sutlej (India). In G. L. Possehl (ed.) *Harappan Civilization: A Recent Perspective*, 141-165. New Delhi, Oxford & IBH Publishing.
- Shinde, V., T. Osada, M. M. Sharma, A. Uesugi, T. Uno, H. Maemoku, P. Shirvalkar, S. S. Deshpande, A. Kulkarni, A. Sarkar, A. Reddy, V. Rao and V. Dangi 2008a Exploration in the Ghaggar Basin and Excavations at Girawad, Farmana (Rohtak District) and Mitathal (Bhiwani District), Haryana, India. In T. Osada and A. Uesugi (eds.) *Occasional Paper 3: Linguistics, Archaeology and the Human Past*, 77-158. Kyoto, Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature.
- Shinde, V., T. Osada, A. Uesugi and M. M. Kumar 2008b A Report on Excavations at Farmana 2007-08: A Harappan Site in the Ghaggar Basin. In T. Osada and A. Uesugi (eds.) *Occasional Paper 6: Linguistics, Archaeology and the Human Past*, 1-116. Kyoto, Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature.
- Shinde, V., T. Osada and Manmohan Kumar (eds.) 2011a *Excavations at Farmana, District Rohtak, Haryana, India: 2006-2008*. Kyoto, Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature.
- Shinde, V., T. Osada and Manmohan Kumar (eds.) 2011b *Excavations at Girawad, District Rohtak, Haryana, India: 2006*. Kyoto, Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature.
- Suraj Bhan 1973 The Sequence and Spread of Prehistoric Cultures in the Upper Sarasvati Basin. In D. P. Agrawal and A. Ghosh (eds.) *Radiocarbon and Indian Archaeology*, 252-263. Bombay, Tata Institute of Fundamental Research.
- Suraj Bhan 1975 *Excavations at Mitathal (1968) and Other Explorations in the Sutlej-Yamuna Divide*. Kurukshetra, Kurukshetra University.
- Thapar, B. K. 1973 New Traits of the Indus Civilization at Kalibangan: an Appraisal. In N. Hammond (ed.) *South Asian Archaeology*, 85-104. London, Duckworth.
- Uesugi, A. 2011a Chapter 6 Pottery from the Settlement Area. In V. Shinde, T. Osada and Manmohan Kumar (eds.) *Excavations at Farmana, District Rohtak, Haryana, India: 2006-2008*, 168-368. Kyoto, Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature.
- Uesugi, A. 2011b Chapter 9 Pottery from the Cemetery Area. In V. Shinde, T. Osada and Manmohan Kumar (eds.) *Excavations at Farmana, District Rohtak, Haryana, India: 2006-2008*, 674-800. Kyoto, Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature.
- Uesugi, A. 2011c Chapter 4 Pottery. In V. Shinde, T. Osada and Manmohan Kumar (eds.) *Excavations at Girawad, District Rohtak, Haryana, India: 2006*, 40-239. Kyoto, Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature.
- Uesugi, A. 2011d Development of the Inter-regional Interaction System in the Indus Valley and Beyond - A Hypothetical View towards the Formation of an Urban Society. In T. Osada and M. Witzel (eds.) *Cultural Relations between the Indus and the Iranian Plateau during the Third Millennium BCE*, 359-380. Cambridge, Harvard Oriental Series Opera Minora vol.7. Harvard University Press.
- 上杉彰紀 2009 「ガッガル平原における先・原史文化の変遷」『環境変化とインダス文明 2008 年度成果報告書』75-102 頁 総合地球環境学研究所・インダスプロジェクト。
- 上杉彰紀 2010a 『インダス考古学の展望 インダス文明関連発掘遺跡集成』総合地球環境学研究所・インダス・プロジェクト。
- 上杉彰紀 2010b 「先インダス文明期からポスト・インダス文明期における遺跡分布に関する覚書」『環境変化とインダス文明 2009 年度成果報告書』113-141 頁 総合地球環境学研究所・インダスプロジェクト。
- 上杉彰紀・小茄子川歩 2008 「インダス文明社会の成立と展開に関する一考察—彩文土器の編年を手掛かりとして—」『西アジア考古学』9号 101-118 頁。

上杉 彰紀
 ウィスコンシン大学マディソン校人類学科客員研究員
 Akinori UESUGI
 Department of Anthropology,
 University of Wisconsin-Madison